
世界の調和者

yuuyas

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の調和者

【Nコード】

N6499Y

【作者名】

yuyas

【あらすじ】

ある日、神宮正和^{じんぐうましかず}は少女を助けて死んでしまった。だが目を覚ますとそこには純白の世界、さらに目の前で絶世の美女が頭を下げていた？その人は自分のことを神と名乗って・・・「彼方を私の神^{しん}にんしゃ認者^{にんしや}になってもらって、私の担当している世界に生まれ変わっていただきその世界の調和者^{ちやうわしや}になって下さい！」え？なんで！？

よくある異世界転生ものです。魔法や魔物がいたりのファンタジーもので、主人公最強、ハーレムありく主人公朴念仁>（後に正常になります）、人が死んだりします。この様なものが苦手なお方は

ご注意ください。

この作品は初の小説なので、誤字、脱字があると思いますが温かく見ててください。よろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

初投稿です。以後よろしくお願いします。

ブログ

「明日から夏休みだ」

俺、じんぐうまさかず神宮正和は叫んでいた。

なぜ叫んだかって？だってね、去年の夏休みはさんざんだったんだ。

去年のこの日、なんか久しぶりに公園行きたいななんて思ってたら

いきなり、男の子が出てきて道路に飛び出して行ったんだよ。

そしたら、曲がり角からトラックが出てきて男の子が轢かれそうになったんだ。

俺はとっさに飛び出して、男の子を抱え込んだ。

「痛っ」

奇跡的にどちらとも無傷と言っわけにはいかなかったようだ・・・俺は激痛がする右腕の方を見ると中の肉が見えてた・・・

その後、男の子のお母さんが来て、物凄く感謝してくれて救急車まで呼んでくれた。

診察を請けたら、腕の皮がむけて肉が見えてただけだった。

折れてるかと思った・・・

で、このせいで俺は3週間右腕が使い物にならなくなり、治ったと思ったら残りの1週間宿題に追われ夏休みのさよならだ！

今年こそは遊びまくってやる！そんな事を思っていると去年事故にあつた公園に来ていた・・・

嫌な予感がする。

俺はこの場所からいち早く逃げるために、全力で逃げた。へたれだつて、しょうがないだろ

また遭^あつたら夏休み消えてしま^あうじゃないか。

しばらく走つて、さっき通つた交差点にいた。

「はあはあ」

500mぐらい思いつきり走つた。疲れたぜ・・・

俺は顔を上げると横断歩道に5、6歳の女の子が転んでいた。

信号が点灯し始めた、すごく痛かつたのだろつ。危ないから女の子を助けようと

「プップ」

赤信号なのにワゴン車が曲がり始めた。後ろにはパトカーがいる。盗難車だろつ。ん？あの子めっちゃ危なくない？

（助けなきゃ！）

俺は全力で走り、少女を抱えた。

また夏休みが消えたな。また来年夏休み。

「バーン！」

・ 音と一緒に俺の体に激痛が放ち、それと共に意識が消えていった・

そして、一人の少年が少女助けて命を落とした。

プロローグ（後書き）

読んで下さった方ありがとうございます。

この話で主人公がどんな人か分かったと思います。危険なのを分かっている人も人を助けてしまう。主人公体質、これ以外にも人助けしているのですがそれは、ストックが切れたときに書かせていただきます。と思っています。

次回は神との対面で、ここで色々能力をもらいます。
次話も読んでもらえたら嬉しいです。

神の世界（前書き）

2回目の投稿です。この作品で結構重要な神の登場です。名はヘルシスです。どうぞ、お楽しみください。

神の世界

「うゝ」

真つ暗な世界だ。

体が重い、なんでだ？

何かあつたけ？

あれ？確か女の子を助けて、そのまま・・・

死んだ？

でも、なんで体に感覚あるんだ？

力を入れると動けそうだな。

俺は回りを確認するため目を開いた。

「なんだゝ？」

俺は驚いた。目の前には純白の世界で広がっていた。それと、「何であなた頭下げてるの？」

なんかわかんないけど目の前に金髪の女性が頭を下げていたのだ。

「すみませんでした！」

頭を下げながら腰を何度も折っては伸ばしを繰り返してた。
辛くないのだろうか？

あ、そうじゃなかった。

「頭上げてください。」

「はい・・・」

やっと顔を上げてくれた。

それにしてもきれい過ぎるだろう。

目の前の女性は絶世の美女と言ってもおかしくは無いだろう。

それくらい的美貌《びぼう》だった。

でも、凄いまぶたがうるうるしてる。

にしても綺麗だな

「どうしたのですか？ぼつとして？」

あ、やば見とれてた。

「い、いえちょっと考えごととして・・・それにしてもここ何所ですか？」

あと何で謝っていたんですか？」

「ここですか？ここは神の世界という場所ですね。

謝っていた理由は・・・私のミスで彼方を死なせてしまって・・・

」

「え？ミスですか・・・」

「はい・・・少し時空を歪めてしまい、

彼方の生きる時間を減らしてしまって・・・本当にすいませんでした。」

「またもや頭を下げられてしまった。あのく何でまた涙目になるんですか！」

「いいですよ。ミスぐらい誰にもありますから。」

「それより次進みません？ほらくあの、神の世界？だっけその事で。」

「ありがとうございます。優しいですね。ではお言葉に甘えてこの説明をします。」

「神の世界言葉通りで、神々が住む世界です」

「切り替え速えく神々が住む世界？じゃあこの人は・・・」

「じゃあ、あなたは神様？」

「はい！私は神です。神宮正和さん」

「何で俺の名前を？」

「当たり前ですよ。神なんですから名前ぐらいは誰でも言えます」

「あ、そっか。神様の名前も教えてください。」

「私ですか？私はヘルシスです」

「ヘルシス、あ！すいませんヘルシス様」

「やばい呼び捨ててしまった。」

「いいですよ、ヘルシスで。というか、敬語もやめてもらえたら嬉しいです。」

「わかりました。じゃあ、ヘルシスさんで」

「はい！」

良かった優しい神様で。

そつえば何でここにいるんだ？
だってここ神の世界だよな？

「ヘルシスさん。俺はなんでここにいるの？」
「あ、話してませんでしたね」

彼女は大きく息を吸ってから・・・

「彼方に私の神認者しんごんしゃになつてもらつて、
私の担当ちやうわしやしている世界に生まれ変わっていただき
その世界の調和者ちやうわしやになつて下さい」

え？なんで！？

「何ですか！？こんな何にも取り得の無い俺なんか。っていうか
神認者や調和者ちやうわしやつてなんですか？」

「あ、あんまり一気に言わないでくださいよ」
「なんか、涙目になつてるし。これって俺悪い？
つか神としての威厳いげんなさ過ぎだろう。」

なんか、静かになつてしまった。居ゐずらい・・・
しょうがない俺から言わないと・・・

「すみません。一気に言いすぎました。じゃあ、一つ一つお願いします」

俺って結構甘いかも。

どうやら落ち着いた様で口を開いた。

「ありがとうございます。まずは神認者ですね……………」

俺は彼女の長しんいお話を聞いていた。

聞いた話だと神認者しんにんしゃと言うのは、

俺みたいに前の世界で死んだ奴がある一定の条件が揃そろえば、

神が認め—この世界（神の世界）に呼ばれて、生まれ変わり

神が干渉できない世界の乱れなどを直すものらしい。

このとき、前の世界の記憶は残っていないく、

神との対面時からの記憶しか残っていないみたいだ。

さらに、この神認者つてのにえらばれた奴は

そいつを認めた神の、1000分の1の力と

神神器の武器をもつ事が出来るようだ。

世せのちちの調和者（以後調和者と訳す）は、

その世界で一人で世界の一番高位神がその者気に入り、

神神の世界のここに呼び出してその人に自分の担当している世界の調和者になつてもらって、

その世界に戻り暴走した神認者^{しんごんしゃ}や魔物の数を倒したりして調和するようだ。

そして、その人は神認者と一緒に神の力を受け取る事が出来る。だが、力の桁が違う調和者はその神の10分の1の力を受け取れるみたいだ。

だが、神器はもらえないし普段は力事態に封印が掛かっていて、それを解除しなければその力は使えなく、他の神認者から比べてかなり弱いようだ。

たとえ、解除しても力に耐え切れず自爆するか、

その力を操っても体に負担が掛かり大怪我を負ったり、

あまりの力に世界が拒絶して周囲の環境がかなり悪くなったりするようだ。

使い勝手悪いな。

俺のように調和者と神認者の二つの力をもっている事は前代未聞のようで、神認者はヘルシスさんが自分の世界に干渉したいからしたようだ。調和者は前の世界^{地球}の記憶がある程度もっていないと出来ないようなので（何故だかは教えてくれなかった）俺には前の世界の記憶は残るようだ。

なんで俺が選ばれたかはヘルシスさんに気に入られた事と、事故に遭いそうになった人たちを助けたりした事で、

自分で言うのもなんだがそのく、心が優しいっていうのが重要みたいだ／＼

恥ずかしいな。

「誰に話しているんですか？」

えっ？なんで声に出していないはず。

「考えただけで思考は読めますよ。神ですから！」
「すごいすね」

これしか言えない、今から考える事をやめよう。
読まれる。怖い

「でっ、話によると力と神器^{しんぎ}つてのをくれるみたいだけど・・・」
「あんまり、驚かないんですね？まあ、話が早くていいんですけどね」

「じゃあ、お願い」
「はい。まず、力を初めに」

あゝ眩しいなんて素晴らしい笑顔なのだろう。

バカな事を考えていると、

「では、いきますよ」

そんな事を言うと、ヘルシスさんはこっちによって来て

「ん~~~~」

え？唇にやわらかい感触が

キ、キ、キスしてるゝ

「ぱっあゝ契約完了です。」

「なんで、キスなんですかゝ」

俺はいきなりされた驚きとこんなきれいな人^神がキスしてくれた事の嬉しさや恥ずかしさで混乱しながら言った。

「あ、人はキスを愛情表現でやるんですね、忘れてました。

今のは、契約のキスで神が神認者^{しんにんしゃ}にすることです。

どうですか？力が湧いてきたはずです。」

確かに力が湧いてきた。さっきはキスで気づかなかったけどこれは凄いな。

契約が親父だと最悪だな。ヘルシスさんで良かった。

俺は一人で安心してると苦笑いしているヘルシスさんに手招きされた。

「あのゝいいですか？」

「すいません」

「いいんですよ」

なんて最高の笑顔だ癒されるゝ

「次は、神器ですね。正和さんの神器はゝ」「正和でいいよ。」えゝ

はい正和／／／

顔を赤くしてる。なんでだ？まあいいか。

「えつと正和の神器はこれです。」

ヘルシスさんは右手に力を込めると白い粒子が集まってきて、一つに固まった。

その手には白色の刀が握られていた。

「これは？」

「これは、ホワイトウェポン白の武器です。」

見た目のまんまですけどね。両手出してください。」

言われた通りに両手を出すと、

ヘルシスさんが白銀の武器を粒子にして俺の手に重ねた。

彼女と俺の手の間が強く白く光った。

彼女は手を離すと「出来上がりです。」

と言ってきた。俺の体は何にも変化がない。

「何か武器をイメージしてください。何でもいいですよ。」

基本的に真空の場所じゃなければ出せますよ。

一種の創造能力を武器限定にして空間に出しているだけですから」

俺は言われた通りに一本の短剣を想像してみると、
右手から何もかもが白い短剣が有った。

「すごい！」

「はい！消す方法は無くなれって念じれば消えます。

切れ味や精度は武器を想像した時のイメージが大切になります。

例えば何でも切れろって思えば何でも切れる武器の出来上がりです。

武器の数などは想像の時に思ってください」

「わかりました」

俺は消えろと念じた。すると短剣が粒子に戻り、右手に吸い込まれていった。

「なんてチート」

「はい、これは物理系最強武器ですから。他の神認者の方も持っていますけどね。

これはほどでは無いですけどね。

あつ、でも物理以外でも空間、時空、特殊など色々ありますけど」

色々あるな。

俺はしばらくヘルシスさんと話した。

世界の名は「イニユート」と言い。詳しい事は転生した時に、勉強してくださいとのことだ。

神認者や調和者の力も転生した後で自分で見つけてくれと。

「なんで？」って聞くと、

「転生する前に教えてしまうとそれを意識してしまって、この世界で暴走してしまうので言えません。」

こう彼女が言っているのだからしょうがないでしょう。
転生後は記憶は残り、何かが遭ったら俺の夢の中で話ができるっ
て言っていた。
ビックリ！

「そろそろ、行くときですね。こっちに来てください。」

言われた通りにヘルシスさんの所に行く。

「ありがとうございます。ヘルシスさん」

「いえいえ、これからお願いしますね。正和」

にっこりと微笑んでいた。幸せだ

「では転生を開始します。『空間転生術』！」
くわんてんせいじゆつ

彼女がそう言つと俺の意識が無くなり、
再び真っ黒な空間に入って行った。

神の世界（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。今回は正和が死んだ後に来た神の世界のお話です。結構重要な話でした。神認者や、調和者（世界の調和者）の説明難しかったです。改めて文才の無さを自覚しました・・・

次話は新章です。今までののはプロローグだったので、今までよりも頑張って投稿していこうと思います。次回もよろしくお願いします。

設定？（前書き）

設定です。今までの登場人物やその人達のステータスや使用魔法、登場魔物を書いていきます。あらわし方はE↓A↓S↓SS↓SS
S↓X↓R左から段々能力が上がっています。成人男性の平均がDとします。

この作品は、ギルドのランクや魔物、人、その他種族の強さでもこのあらわし方でいきます。無い場合は-で表します。
では、設定？です。どうぞ！

設定？

主要人物、その他登場人物

名 神宮 正和（男）
じんぐうまさかず

種族 人族 歳 14歳

体重 56kg 身長167cm

容姿 上の中

髪は黒の長さは首の中間くらい
目の色は黒

性格 誰かが困っていたら後先考えずに助けに行ってしまう。
女性の恋心には全く気づかない。
負けず嫌い、やさしい、努力家、朴念仁

ステータス 知力S 力A 走力S 体力A 精神B

集中A 回復C 運C

←（ヘルシスから力をもらった後）

知力S 力SSS 走力SSS 体力SSS 精

神B 集中A 回復SSS 運C

（魔法ステータス）

魔力量 - 、精製度 - 、操作力 - 、戦闘力C（魔法が使えないので）

属性 火 - 、水 - 、風 - 、土 - 、雷 - 、闇 - 、光 - 、無 - 、

氷 - 、時 - 、重力 - 、空間 - 、

特殊能力

ホワイトウェポン
白の武器、？？？、？？？、？？？、？？？、？？？、

~~~~~

武器  
ホワイトウェポン  
白の武器

キャラ説明

誰でも助けてしまう優しい人。14歳の夏休み前に少女を助け死んでしまったが、神・ヘルシスのミスで死んでしまったと言う事で彼女の神認者と世界の調和者になり新たな世界に生まれ変わる事になった。もともと運動神経や頭も悪くないため、ヘルシスから力をもらった時に普通の人としてはありえないスペックになってしまった。

名 ヘルシス（女）

種族 神族 歳 ? 歳

体重 ? k g 身長 172 c m

顔 上の上

髪は金で長さが腰までである  
目の色は金

性格 何事も完璧にやる。恥ずかしがりや。  
完ぺき主義、恥ずかしがりや

|       |      |     |      |          |      |
|-------|------|-----|------|----------|------|
| ステータス | 知力 R | 力 R | 走力 E | 体力 S S S | 精神 R |
| 集中 R  | 回復 R | 運 R |      |          |      |

属性 魔力量 R、精製度 R、操作力 R、戦闘力 R  
火 R、水 R、風 R、土 R、雷 R、闇 R、光 R、無 R、  
氷 R、時 R、重力 R、空間 R、

特殊能力  
ホワイトウェポン  
白の武器、神気、透し、思考解読、瞬間転移、夢介入、空間制御、  
時間制御、

武器 ホワイトウェポン  
白の武器

キャラ説明  
正和の命を時空を歪めて短くしてしまうと言うミスをしてしまった、  
かなり天然な神様。だが、神の中ではトップクラスの力を秘めてお  
り、一つの世界の担当神である。ちょうど空いていた世界の調和者  
の座を正和に任せ更には世界に干渉するために自分の神認者の座ま  
でも与えてしまった。  
イニキュート  
せかいのちようわしや  
しんにんしや

モブキャラ  
男子（男）  
特にないので無し

女の子（女）  
特にないので無し

女のこのお母さん（女）  
特にないので無し

登場魔法

・空間転生術

登場魔物

（登場しません）

## 設定？（後書き）

設定？でした。設定は章の終わりや、長ければ区切りのいい所でやっています。武器は5〜10個ぐらい溜まったら「武器設定」、道具は（以後アイテム）は30個ほど溜まればやろうと思います。次はいよいよ新章突入！です。

（編集して登場魔法だけ載せて詳しい設定は別に載せます）

## 誕生（前書き）

yuyasです。この章は正和の転生先「イニユート」も世界観や正和の力について書こうと思います。さて、今回の話は短く正和がイニユートに産まれてくる話です。お楽しみください。

## 誕生

暗いな。

俺は確か・・・神ヘルシスさんに神の世界だっけか？で会って・・・  
しんにんしゃ神認者や調和者世界の調和者について話されて。

転生して、その世界の調和者になるんだっけか？  
あれ？っかここ何所だ？

俺はいきなりの状況に困惑していると  
行き成り激しい光が体全体を包んだ。  
眩しい！俺は声を出そうとすると

「おぎやああ〜おぎやああ〜」

ん？おぎやああ〜おぎやああ〜？  
な、なんだ！声がおぎや〜だと！  
よ、よし、れ、冷静になるんだ。  
まずは深呼吸を（スーハー、スーハ）  
OK 落ち着いた。声出すぞ〜

「おぎやああ〜おぎやああ〜」

・・・・・・

なんじゃと〜！

何の嫌がらせだ！

俺が何をした！

14歳に赤ちゃんをやらせると！

精神的にきついだろ・・・ごめんよ、母さん。

俺は30秒間心の中で泣き叫んだ・・・

おっと、何かがそれだな。

まず俺は、転生して・・・

あつ、そっか転生したから赤ちゃんなのか！

なる。 (どうしようかと思ったよ。良かった)

「アーサー産まりましたよ」

一人で安心感に浸っていると、

疲れきったような、だがとても美しい女性の声が聞こえた。  
誰だ？

「ああ、マリアご苦労様。

この子の名前どうする？ジルも考えるか？」

今度は、逞しい男の人の声が聞こえてきて、

そのままアーサーと呼ばれる男性が俺を抱き上げた。

「うん！かんがえる。なまえはね、オが付くなまえがいいなあ」

次は、幼い感じの男の子、多分ジルって子だろう。

その子の声が聞こえてきた。

「オですか？オ、オ、オ！オルツスなんて、どうですか？アーサー」  
「オルツス。いい名前だ。それにしよう、この子は今からオルツス・  
ワースンだ！」  
「おるっす。うん！いい、ぼくも、きにいったたよ」

三人で楽しそうに笑っている。

いいなあ〜仲が良くて楽しそう。  
それで、今の状況と話を聞くと俺がオルツス赤ちゃんで、  
産んでくれたのはさっきの女性マリアみたいだな。

「オルツス、これからよろしくね」

女性マリアが優しく俺の頭を撫でながら言ってくれた。

俺は新たな家族に迎えられ、  
新鮮な気持ちと家族の温かさを久しぶりに感じたせいか、  
ものすごく眠たくなってきた。

そして、俺はそんな気持ちを抱きながら深い深い眠りについていった。

こうして、このイニユートの世界に、  
神に世界の調和を任せられた一人の少年が誕生した。

## 誕生（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。この話では登場人物が増えます。オルツスは正和ですから、3人ですけどね。この三人の設定などはこの章の中間が終わりで設定？として投稿したいと思います。

第2章の「幼少時代」では主にこの4人＋村人＋ぼちぼち魔物で進めていこうかなと思います。増やしすぎると名前に困ってしまいますが、そこは頑張っていこうと思います！では、次話でもよろしく願います。

## 夢（前書き）

寒いですね。この頃、朝起きると「ぶるぶる」って体が震えます。さて、新たに投稿しました。タイトルは「夢」です。

前にコメントを頂いて、説明不足かなあ。と思ったので2話目の「神の世界」の補足として書かせてもらいました。では、お楽しみください。

## 夢

ん？ここは何所だ？

いつもみたいに真っ暗ではないけど、  
どっちかって言うとも明るいな。

俺、確か赤ちゃんになってたはず。

眠たくなつて寝たのか。赤ちゃんだからしょうがないな。

うん。一人で納得してみた。というか体が赤ちゃんなんだけど・・・  
まあいいか。本当に、ここ何所だ？

「正和、ここですよ」

その声は数時間前に聞いた、笑顔の素晴らしいあの、神様の声だった。

「ヘルシスさん。お久しぶり？」

「お久しぶりです。正和。」

そう言つて彼女は、ふか／＼頭を下げる。俺もつられて礼をする。

「どうしたんですか？ヘルシスさんがいるって事は、

ここは俺の夢の中ですね。」

「はい、そうです。結構大変でした／＼神の世界とここを繋げるの。  
軽く15年かかりましたね」

「15年！」

ビックリした。十五年って、俺さっきこの世界来たばかりだぞ。

「大変なんですよ。空間の移動は、次はすぐ来れますけどね。」

「凄いですね！まあ神だから何でもありか・・・」

凄いなあ。これしか言えないよ。神、恐るべき。

「でっ、ヘルシスさん何で来たんですか？」

「えっとですね。前、力が暴走するかもしれないからと言って  
詳しい力の事言わなかったじゃないですか。」

あの後で気づいたんですけど、あんまり自分の力を知らない  
他の神認者しんこんしゃの人達に襲われたり、

暴走した時に力の制御方法を知らないと、

私が来る前に暴走を止められないと思っただんですよ。

なので、力のある程度の情報と、この世界の法則イニョートを説明しに来  
ました。」

要するに、俺が何も力を使えない小さい時や、

力を使った時に暴走した時のために、

その力の制御方法を知らないと暴走を止められないからと、

前に俺が力を酷使し過ぎるとイニョートが、

それを拒絶して周りの自然環境が悪くなるとか言っていたから

どのようにやったら世界が拒絶しないですむかで

法則を説明するんだな

「わかりました。お願いします。」

「はい。まず、正和さんの力から言いますね・・・」

「ヘルシスさんが説明を始めてから約1時間」

長かったぜ！一通り聞いてやっとわかった。

えっとつまり、俺の力は神認者の神の1000分の1の力と、  
今は封印されている世界の調和者の神の10分の1力の二つある。  
せかいのちようわしゃ

神認者の力は神器俺の場合は白の武器と、  
しんにんしゃ しんぎ ホワイトウェポン

神級魔術が使えることと、致命傷だと思われる傷も一瞬で直したり、  
契約した神の得意属性の魔法がとても強くなるらしい。

ヘルシスさんは全属性得意らしい。

（魔法には初級、下級、中級、上級、最上級があり、

普通の人では最上級が使える魔法の限界で、

詠唱が必要になり、

神級は文字通り神のレベルの魔法で魔術と言って神認者しか使えず、

詠唱が要らないようだ）

だが、いくら他の神認者達とは基本的な力では勝っていても、

技能や経験の差で戦ったら即死するらしい・・・

だから、強くなるまでは戦うと言われた。

どうやら他の神認者達は、あまり積極的に行動していないらしい。

大きな行動を起こす時は神が命令を出して、

神の利益になるように動くようだ。

調和者の力は6歳（平均的に自分で魔力を操れる歳）になったら封印が甘くなり、

過程さえふめば、俺でも封印を一時解放出来るようだ。

開放すると魔力がほぼ、上限無しで使えるようになる事だ。

でも、力が暴走したりする事もあり。

それを止めるには、自分で「一時封印魔術<sup>いちじふういんまじゅつ</sup>」を使わないと駄目らしい。

後で覚えさせられるようだ・・・

後の力は飢えた土地、人工的に破壊された自然の回復や、  
しんにんしゃ神認者の精神世界から神の世界へ干渉する力だ。

（神認者が行動した時にその行動が世界にとって、

何らかの悪影響が及ぶのなら、その神認者を倒し

その人の精神世界から直接神の世界に干渉して

神を倒すのが調和者の仕事だからだ。）

その後にヘルシスさんが神に罰を与えて反省させるようだ。

それ以外は、魔物を倒したときに出る魂<sup>憎悪</sup>を清め

清浄な魂にする事だ。

つまり、調和者の力は世界の乱れを調和するためのようなものがほとんどだ。

ホワイト・ウエボン

白い武器は前に言われた通り、

俺が思えば、色は絶対に白だがどんな武器を造れる。

後は消えると念じなければ、武器は壊れるまで消えないらしい。

イニユートでは、色々な種族が共存しており、  
（人族、魔族、人獣族、獣族、エルフ族、妖精族、聖獣族、天使族、  
悪魔族）など

沢山いるようだ。陸は大きな大陸が二つあって、  
他にもさまざまな島が多くあると言う。

エルフ、妖精、聖獣以外は村や町に住んでおり、  
この三つの種族はそれぞれ特定の場所にいるようだ。  
言葉はヘルシスさんが俺に『つうやくまほう通訳魔法』を  
かけているから余計な事は考えなくていいとの事だ。

問題なのは急激に魔物の数が爆発的に増えていて、  
民間の種族達が襲われたりする被害が多発しているようだ。  
なので、まず神認者を倒すより先に、

魔物の数を減らせてくれると嬉しいのことだ。

だが、倒した際に出る魂憎悪が人の中に入ると、  
その人は、魔物の魂に取り付かれ自らも魔物になり、  
人を襲うようだ。

さらに、この世界にあまり強い負担をかけると空気中の魔力マナが暴れて、  
自然環境を壊すようだ。

なので、この世界の人達は  
まず、結界魔法を覚えてから攻撃、回復、補助などの魔法を覚える  
ようだ。

これが、ヘルシスさんが一時間ぐらいかけて説明してくれた内容を  
俺なりに、噛み砕いて改めて自分で自分自身に説明したことだ。

「相変わらず長いですね」

俺はもうふらふらだ。

すると、苦笑いしてから

「長くて、すいません。このくらいです。

後は正和に「一時封印術<sup>いちじふういんじゅつ</sup>」を

習得してもらうだけです。

これは、神級なので詠唱は必要ありません。

やり方は自分の胸に魔力を貯めてそれを凝縮する感じです。

ヘルシスさんがやって見せてくれた。

すると、ヘルシスさんの体中の魔力が胸に集まっていて、

「す」っと息を吸ってから

『一時封印術！』

と言った。

すると、白い力がその魔力を上から飲み込んだ。

パチパチ、拍手！凄いね

「さあ、正和もやってみましょう」

「OKです」

俺は集中すると赤ちゃんの小さな体の魔力が胸に集まってくる。

そして・・・「一時封印魔術！」

と叫ぶと、俺もヘルシスさんと同じように

白い力が集っていき魔力を飲み込んだ。

体に感じていた魔力が無くなった感じがする・・・

「このくらいですかね。言う事は言いました。『一時封印術』は、一時間ぐらいいしか効かないので、使ったを感知したら私が『封印魔術』を

掛けに行きますので」

「わかりました。ありがとうございます」

「あつ！時間の事言うの忘れてました。イニユートの時間は前の世界と同じです。<sup>球</sup>

正和さんが産まれたのが夜だったので、産まれた後日の朝ですね  
イニユートの事をよろしく願います」

「はい、頑張ってください」

「はい」頑張ってください」

彼女がそう言ういい、ニッコリと笑うと

「『空間移動魔術』<sup>くうかんいどうまじゆつ</sup>」と言うと、

俺の夢から消えて行った・・・

しばらくすると、何所からかやさしい声が聞こえてきた。  
それは昨日聞いた。俺を産んでくれた新しい母の声だ。

目を覚ますとここに<sup>イニユート</sup>来てからの始めての一日が始まった。

## 夢（後書き）

どうでしたか？2話ではわからなかった事がわかってもらえていたら嬉しいです。

前書きでも書いた、コメントを頂いた事なんですけど・・・とても参考になりました。ありがとうございます。

私は始めて小説と言うものを書くので色々と気づかないで投稿してしまつて、後で「あ、」ってなる事が多いのでコメントで指摘くださつて、とてもありがたく思います。

他の人々も気になる事や指摘などあればコメントをよろしく願います。

最後まで読んでくださつてありがとうございます。

## 5年後　ゝ前編ゝ（前書き）

6話目の投稿です！いやぁゝ本当に寒い。風ひいちゃいました。

さて、私の私情はここまでにしてこの話の説明です！

タイトル通り5年後です。速いですね。のろのろ書いていくよりも、  
速く正和オルツスの活躍を書いた方がいいかな？と思ったので一気に5年も  
進めちゃいました！と言う事で結構、幼少期の展開は素早く書こう  
かなと思います。

この話は、なんと！ヒロインが登場します！どんな子かは、この  
話を見て下さい！では、お楽しみください！

## 5年後　～前編～

「ふあ～」

ぼくは大きな欠伸して起きた。

現在7時30分、日付けは12月25日の505年です。

あ、今日僕の誕生日だ。

プレゼント～♪

ベットから飛び起きて周りを見る。

「あつた～！」

見つけた！ベットの下に五角形の小さなケースがあった。

それを開けようとしてケースを持ってみる。

すると、箱の側面に一枚の紙が挟まっていた。

？なんか書いてある。母上の字だ。

読んでみよう・・・

オルツス誕生日おめでとう。

今日はあなたの5回目の誕生日ですね。おめでとうございます。早速ですがこの紙を見ているって事は五角形の箱を持っていますね。その中に入っているのはネックレスです。なぜ行き成りこのプレゼント

ントを渡したかと言うと、

ワースン家のでの決まりで男の子の場合5歳の誕生日の時に、

それをその子が起きた時に渡すというのが決まりになっています。

お母さん達は今日のあなたの誕生日パーティーの準備で王都へ買い出しに行っています。

なので、私達はお昼まで帰ってこれません。

少し寂しいかと思いますが我慢してください。

下の部屋にはウールがいるのでウールと遊んでいてくださいね。

朝食は空間庫くうかんこに入っているのですそれを食べてください。

ご飯を食べている時にさっきのネックレスをかけてみてください。

それでは、今日の誕生日パーティー楽しみにしてくださいね。

なるほど、母上たちは買い物に行ったのか。

そういえば、さっきは浮かれていて考えて無かったがもう3年か

この世界に来たのは・・・

そうだな、何にもやる事無いし、腹も減っていないし今までの事を振り返ってみるか・・・

ぼくの名前は神宮正和で地球という世界に住んでいた。

でも、14歳の時にぼくは人を助けて死んでしまった。

だけど、目を覚ますとそこにはヘルシスヘルシスって言う神様がいて、

ぼくにその人は神認者しんにんしゃと世界の調和者せかいのちやうわしやの力をくれて、

僕はヘルシスさんの神認者と、この世界の調和者っていう形でインニ  
ュートに転生してきた。

僕が産まれたのは、ワースン家だ。

父上のアーサーがぼく達の住む大陸マーズの南の森にあるイチイ村  
と言うところの領主をしている。

ワースン家は中流貴族でそこその権力をもっていて  
結構大きい屋敷に住んでいる。

家族構成は父がアーサー、母はマリア、兄はジル、そしてぼくオルツ  
スだ。

さらにペットを飼っていて名前はウールだ。

5年間であつた事は色々あるから気が向いたら思い出してみよう。

父上はさつきも説明が貴族だ。背は180前後くらいで金色の髪  
と、

同色の目をしている。この世界では目や髪の色が様々ある。

顔はイケメン過ぎるくらいで26歳だ。

母上は元平民だが魔法学校に通っていて、

学年では主席を取るほど優秀な魔法戦闘師だ。

父上とは学校の在籍中に知り合つて、父上の一目ぼれだ。

その後に色々あつたみたいだが、うまくいって今ではラブラブだ。  
色々あつた事は今度話そう。

背丈は165前後、金色の髪と赤い色の目が特徴で、

ヘルシスさん並の美貌。26歳。

兄上のジルは父と同じ目と髪を持っていて、

ぼくの事を大切にしてくれるとっても優しい兄だ。

兄上はワースン家を引き継ぐ事が決まっていて後3年したら、  
父上と母上の行っていた学校に入ることになっている。

背丈は140前後だ。

幼いながらも村の女の子に20回も告白されている。  
イケメンだ・・・そこは気に入らない・・・今9歳だ。

ぼくは、さつきも行つたが転生者でこの世界の調和者であり、  
ヘルシスさんの神認者だ。

金色の髪と左に金色の目、右に赤色の目のオッドアイだ。

この事は、家族にしか知られて無い。

父上がぼくが産まれて、その事に気づき左目に「変色魔法」を  
掛けたため知られずにすんだ。

オッドアイはこの世界での「神災」しんさいを

意味していてあまり良く思われていない。

なぜ、一人称が俺からぼくになったかと言うと、  
前に俺って言ったら・・・母上が泣きながら

「オ、オルツスがゝふ、ふ、不良になちゃったゝ」

と言いながらぼくをぶらぶら揺らすから・・・

それがトラウマになってしまい、今ではぼくになっている・・・  
いずれは俺に直すつもりだ。

ぼくの背は100前後だ。

ぼくの神器しんぎの白ホワイトウェポンの武器は、

まだ使っていない、産まれた日以来ヘルシスさんは夢の中に現れて  
いなくて、

何も出来ない状態だ。もうちょっとしたら、

兄上が今、父上と鍛錬をしているから、

僕も鍛錬を請けれるように頼もうと思う。

頑張ろう！

ウールはワースン家で飼っている。獣族の狼型だ。

獣族は地球という動物みたいなものだが、高い知能を保有していてもっとも高いものでは人型になれるほどである。

人獣族は人族とこの獣族（人型になれる）の子供である。

獣族はよく、使い魔と呼ばれる。元は父上の使い魔だったらしいが、

今はペットになっている。何でもかは次の機会で話そう。

体長は90前後で耳がもふもふしていて可愛いし温かい。凄く気に入っている。

「ふあゝ」

また、欠伸が出たよ。このくらいかな？

お腹空いたなゝご飯食べよう。

その時にプレゼントのネックレスを見てみよう。

ぼくは服を着替えてウールの居る1階の居間に下りて行った。

「がうがう」

居間に下りるとウールが吠えながら、こっちに寄って来た。

「おはよう、ウール。僕たち昼過ぎまで二人だよ」

そう、問いかけると・・・

「がう！」

と、返事をしてくれた。本当に頭が良いんだな。

ぼくは関心しているとウールが、

ぼくの分と自分の分の朝食を持ってきてくれた。

「ありがとう、ウール」

「がう」

撫でてやると、ウールは気持ちよさそうに目を細めて、  
吠えてくれた。

今日の朝食はパンとハウイ兎のソーと水だ。

（ハウイ兎は魔物である。魔物は倒した後に浄化すれば食べれる。  
結構おいしい）

「いただきます」

ふう、食べ終わった。美味しかった。

「ご馳走様でした」

「がう！」

よし、ネックレスをかけてみよう。

ぼくは五角形の箱からネックレスを取り出し、首にかけてみた・・・

「どう？オルツス？」

ん！？お、お、女の子の声が聞こえる。

ぼくは声のしている方を向くと、そこには・・・



「ふゝ、ふゝ」

よし！落ち着いた！

「OK、OK。君はウールだね」

「そうだよ！私ウールだよ」

テンション高いね

「なんで、喋れるの？」

「えっとね、マスターがそのネックレスかけたから」

うん、答えになってないな

「でも、今外してるよ」

「うんとね、さっきネックレス付けてたときに契約したから・・・  
婚姻の・・・ぽっ／＼／」

「なんじゃとー！！！」

ぼくは子供らしからぬ声を張り上げた。

こ、こ、婚約だとー！？

しかも、「ぽっ／＼／」ってなんだあー！

つか、どうやってたら婚姻が今の状況と繋がるんだ！

「はあ、はあ、はあ」

「お、落ち着いて。じよ、冗談だよ」

マスターとはいずれはなるけど・・・ぽっ／＼／」

だから、「ぽっ／＼／」ってなんなんだあー！

ん？話がそれてるな。

「もう！マスター！話それちゃったじゃないですか！」

ぼくの頭から・・・ピシッ（キレタ音）

「お前のせいじゃろおっ！」

この後ウルとオ・ハ・ナ・シをしました。

## 5年後　　前編　　（後書き）

どうでしたか？ヒロイン。結構ボケさせました。正和オルツスには突っ込みを担当してもらいます。今はヒロインって感じはしません！色々なと頑張らせます。次の話はこれの続きです。後編ですね！今度は少しウールの過去を混ぜてみようかと・・・ネックレスも次で説明します。

感想、又は一言お待ちしております。

最後まで読んで下さってありがとうございます。

## 5年後　く後編く（前書き）

こんにちは！いつも見て下さってありがとうございます。  
7話目です。前回の5年後　く前編くの続きの後編です。ではどうぞ！

## 5年後　　後編

皆さん、こんにちはオルッス・ワーソンです。

あ、本当は神宮正和ね。

やあゝ死んだあの日から驚く事多いやゝ

なんと！飼ってるペットが喋っちゃったよ。

まあ、色々話したから聞いて下さい。

あゝ久しぶりにキレタな。

うん。でウールに（喋ったペット）

お話というなの、イライラ発散をした。

大丈夫だ！暴力は使っていない・・・こちょこちょして気絶さしたけど・・・

しばらくしたら気絶していたウールが目を覚ました。

「マスター酷いよ。傷ものになっちゃったよゝ

お嫁に行けないゝ」

「お前が悪い。ふざけ過ぎだ！」

ぼくは、いかにも怒っていますよ雰囲気で言っているのに・・・

「マスターのせいだよ。マスターがもらってね。キャフゝ」

そう言うとうールは顔を赤め。モジモジし始めた。

こ、こいつは強敵だ。一切ぼくの言う事に耳をかさない。

・・・しようがない。

「そこは、後にしてまず、ウールの正体は何なのか言っ  
てよ。話が進まない」

「もう、しようがないな。マスターは、  
いいよ、私の正体からだね。まず人型になろうか」

ん？人型だつて・・・！

え！？人型ってかなり知力の高い獣族じゃないと出来ないはず。  
もともと、ウールは狼型の獣族だから。

たしか、狼型は獣族の中でもかなり頭のいい方だけど・・・  
なれるのは、フェンリル種だけだったはず。

でも、フェンリル種はかなり大きかった。

ウールみたいに小さくない。

そんな事を考えているうちに、ウールは白い煙に包まれていく・・・

やがて、ウールは煙に包まれ、ぼくは視認出来なくなった。

「どうかな。マスター！うふふふふ」

煙がだんだん晴れてきた。

と言うか、ウールが言葉から興奮と言うなの感情がみえるんだが、  
なんで、コイツ興奮してるんだよ・・・

は、確かこういう感じになったら出てくるのは大抵・・・

裸の女の子！

まずい！

大変な事に気づきその場から立ち去ろうとすると、

「ガシッ」

誰かがぼくの肩を掴んでいる・・・

これはホラーですか!?

マジ怖い、マジ怖い、マジ怖い。

恐る恐る、後ろを振り向くと・・・なんと!そこには

「桃色の桃源郷が!」

「アホか!心読んでるんじゃないっ!」

ウールを叩いた。

確かにそこには桃色の桃源郷が見えたけど・・・

「痛いよ〜マスタ〜酷いよ、正体を見せたただけなのに・・・」

やあ〜確かに今のは心読まれたただだから、

ウールはそんなに悪くないんだが、マジ怖いんだぞ〜

「ごめん。やり過ぎた」

「ニヤリ、じゃあ〜マスター私の胸に溺れて!」

「なぜ、そうなる!」

今度は殴りました。

ウールは部屋の片隅で丸まってます。

衝撃的過ぎた。

だって今のウールの姿は官能的過ぎる・・・

歳は15〜16位で背は170前後、

髪はウールの狼型の時と同じ毛の銀色、

目は赤い。

スタイルは出るとこは出てて、絞まっているところは絞まっている。  
ナイス!って言いたくなるだろう。

だが！今のぼくは5歳児だ。  
精神年齢は19だから結構やばかったが、  
この体に影響されて興奮はしない。  
始めてこの体で良かったと思う。  
あのままだったら、ぼくの理性の鎖が千切れ・・・  
考えただけで恐ろしい。

「もういいから、服着て」

「わかったよ、マスター。でも服どこ？」

あれ？確かに考えてみたら服無いな。  
母上の部屋に行くのはさすがに不味いし、  
ぼくの服だと今よりもエロくなる・・・  
困った・・・

「やっぱり、このままで！」

「だめだ！」

なぜ、そこで顔を明るくする。

「そうだ！」

思いついたぞ！この力を使ってみよう。  
服も戦闘向きにしたら武器になるはず！

ぼくは、早速手に力を込める。

イメージするのは・・・

（戦闘向きの絶対に切れない布製の服）

イメージすると、ぼくの手には白い粒子が集まってきて  
段々、形が構成されてきた。

「ピッカッ！」

と強い光がぼくの手のひらから出てきた。

光が無くなると、ぼくの手には白いシャツと同色のズボンがあった。

「とりあえず、これ着てウール」

「うん」

ここまでが長かった。疲れたぜ。

でも、初めてだったけど使えたな。 ホワイトウェポン 白の武器

これは今、消したら大変な事になるから

ウールが狼型になったら戻そう。

じゃあ、話を聞くか。

「さあ、話してもらおうよウール」

すると、ウールはさっきまで、

ふざけていた奴は思えないほど、真剣な顔になって言った。

「わかったよ、マスター。」

まず、私の正体だね。私はマスターも勘付いている通り、  
フェンリル種だよ。それかなり上位にいる」

「?なんで、ウールはこんな家のペットになっっているんだ?」

そうだ、フェンリル種は魔物とは違うが基本的には、  
森などで集団で暮らしている。

しかも誇りが高く、使い魔として召喚されても  
契約を拒み、始めは戦闘を行い勝利し、主を認めないと  
そのまま、逃げられてしまうのだ。

たとえ、契約をしても主以外の言う事は聞かない。

だから、フェンリル種はこの様な家でペットになっているのは有り得ないのだ。

でも、ウールは家族みんなの言う事を聞いている。  
なぜだ？

「ペットじゃなくて家族ファミリーと言って欲しいな」

そう言ってニツコリと微笑む。

若干ふざけてる感があるけどそのままにしよう。  
話が進まない。

「わかった。じゃあどうして家族に？」

「うん、マスターはアーサーが

私と同じ狼型の獣族を使い魔として召喚したのを知ってるよね」

父上のこと思いつき呼び捨てだよ・・・

まあ、いいか。

ん？気になることがあったな。

確か「私と同じ狼型の獣族を使い魔として召喚した・・・」

「おかしくないか？だって、父上が召喚したのは確かに狼型の獣族だったけど、

それってウールの事じゃないのか？」

すると、首を振って

「違うよ。アーサーが召喚したのは私のお母さん」

「そうなのか。で、なんでこの話と繋がる？」

「繋がり？繋がりは、簡単だよ。

私のお母さんがアーサーの事を気にいちゃって

そのまま・・・その間に」

「え？それって母上のこと？」

まずくない？したらばくって人獣族に分類されるよね。

「違うよ」そのまえにフェンリル族は精が無くても子は産まれるから」

良かった。でも精を必要としないって、生き物で有り得るのか？

「OK。まずはそこを置いておこう。

また話がそれだな、

ウールのお母さんが父上とどうなったの？」

「私のお母さんがアーサーの使い魔って事までは言ったね。

それで、アーサーの事を気に入ったお母さんは、子を作ろうとしたんだけど、

そのときにアーサーがマリアのこと好きで、断ったから自分で子を宿し産んだって訳で、それが私」

父上やるな」母上を選んで振ったんだ。男前だな。

「でも、それじゃあウールのお母さんは何所に行ったの？」

「私のお母さんは、死んじやったんだ・・・」

「ごめん。それはわかったけど

それがどうしてウールがここにフアンソにいるのに関係してるんだ？」

「それはね。お母さんが死ぬ間際アーサーに

「私の子を貴方の子のお嫁にいかせるね」って契約したんだよ。無許可で」

「何で無許可！？勝手に契約は不味いだろう」

「いいんだよ。それでアーサーは私の事を自分の使い魔のお母さん子だからってことでこの家にいるんだよ」

なるほど、そんな事があったのか。

でも、あのネックレスは何なんだ？

「あのネックレスは？」

「あのネックレスは、お母さんが「錯覚魔法」をかけて、5歳になるとあげるって事をワースン家の決まりにして、ネックレス自体は私との契約」

「マジですか。」

でも、兄上は反応しなかったんだろう？」

「そうだよ。ジルでも良かったんだけど、

こうやって喋れなかったから私が拒否したの。

マスターはただの子供じゃないし」

え！？驚いた。コイツは気づいてる！

試してみるか？

「何言ってるんだよ。ウールぼくはただの子供だよ」

出来るだけ平然と答えてみるが・・・

「嘘は良くないよマスター。」

お母さんが私の為にある程度知識を残してくれたからわかるけど、マスターの魔力は2つの異様な力で出来ているのがわかるもん」

さすが、フェンリル種だな。知力は人よりあるな。どうする？ここで言うか？

どうやら、どこへ行ってもウールは付いて来るし、フェンリル族はかなり強い。

本当の事を話して完全に味方に付けるか？

さっき、知識ももらったって言っていたから

相談できる事は多いかもな。

ここは乗るべきだ！

「・・・そうだよ。ウール、ぼくはただの子じゃない」

「やっぱりね。どうせ神認者<sup>しんにんしや</sup>かなんかでしょ」

そこまで気づいているのか。さすがだな。

「うん。ウールの予想通り。ぼくは神認者だ」

そう告げると、ニコニコして笑いかけてくる。

「OKだよ。マスターこれからよろしくね」

「ああ、よろしく」

「で、ウール小さくなれる？」

「ん？出来るけど、どうして？」

ぼく達は話をこんな感じで続けていた。

「色々と目のやり場に困るから・・・」

そうなのだ。今のウールは目のやり場に困る・・・  
だって、見た目15、16のウールが、

ぼくの簡易で作った白の服を上下に一枚着てるだけ。  
後はご想像にお任せします。

「わかったよ。マスターどのくらいがいい？」

「じゃあ、ぼくと同じ年くらいで・・・」

「え、もしかしてマスターはロリ

「ちよとまったロリコンではない」

良かったよ。ウールは心配したのだ♪」

本当にぼくはロリコンではない。

そんな事を考えていると、ウールはいつの間にか  
ぼく位の背丈になっていて顔も少し幼くなっていた。  
あ、やばい服作らなきゃ。

そう思つて、ぼくは服創造に取りかかった。

これから付いて来てもらうから、簡易じゃない方が良いか。

一応女の子だし、ズボンタイプよりもドレスっぽい方が良いし、  
肌着は無理だな。色々と無理だ。勘弁してもらおう。

（さつきより小さくて、機能性は絶対に切れない耐久性、

短縮自在でこれからウールが大きくなっても着れて、人型になつ  
た時のみ現れる。

デザインは下は膝までの丈のドレスみたいの・・・)

そう思つて作ると膝位までの丈の白のドレスが出来た。

「ウール。これ着て」

そう言つてドレスを渡す。

ウールは嬉しそうに着てくれた。

しばらくすると・・・

「「「ただいま」」」

皆が帰ってきたようだ。

今日はぼくの誕生日パーティーだ。さあ、楽しもう！

## 5年後　　後編　　（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます。今回の話はどうでしたか？書いてて自分も、ん？って思ってしまった・・・意味の分からないところや誤字、脱字がありましたら一言でお願いします。他にも感想お待ちしてます。

次話はワースン家の皆にウールの事を説明し、オルツス正和の誕生日パーティー会の話だと思います。では、ありがとうございました。

## 誕生日パーティー（前書き）

みなさん、こんにちは！いつも見てくださってありがとうございます。

今回は、主人公オルツスの誕生日パーティー回です。

でも最後には……ってな感じです。今回のウールは少し大人かもしれません！では、お楽しみください。

## 誕生日パーティー

母上達が帰って来た。

ウールの事を見て、皆驚いていた。

その後、ゆつくりと紅茶を飲みながら例の子の話をした。

なぜか父上は話を聞きながら顔を青くしてぶるぶる震えていた。

母上はニツコリと笑いながら、

こめかみに怒りマークを浮かべていた・・・怖い・・・

兄上は何か、今日の王都への買出しで心身ともに疲れている様子で、話を右から左に受け流していた。

話の途中ウールがぼくの正体を言いそうになったが、ぼくが白針を創造してウールに投げつけて口止めた。こんな事があったが、皆わかってくれてついでにぼくが旅の出来る歳になったら一人旅を試みたいと言うと。

あっさりと了承してくれた。

母上は若干ぼくを涙目で睨んでいたが・・・

そして、嬉しい事に旅に出るならと父上が兄上と、一緒に鍛錬をやってくれると言ってくれた。

～PM17:30～

まあ色々な事があったけど

今では皆ぼくの誕生日パーティーの準備をしている。

ぼくがここに来る前に思っていた貴族のお堅い感じのパーティーでは無く

ここでは村の人達が屋敷に集まってくれて村人皆が祝ってくれる。  
前に村人の人に聞いてみたが、  
こんな風に皆で集まって誕生日パーティーこういう事をするのは珍しいし、  
さらには自分達の誕生日村人達パーティーを父上は開く事も凄いと言っていた。  
そんな事もあり皆ぼく達に、とても良くしてくれる。  
とってもいい村だ。

皆、せっせと働いている。  
ぼくも手伝おうとしたんだが、  
「坊主は働かないで遊んでくれ」  
と言われる。しかも坊主・・・  
まあ、おっちゃん達はみんな、坊主って言うからしょうがないか・・・

そんな感じで今はウールと遊んでいる。  
ウールは今は狼型に戻っている。  
村の人達に見つかったら少しまずいから・・・

しばらく遊んでいると兄上が来た。

「オル、もう少しで始まるから来て」

兄上はぼくのことを「オル」と読んでいる。

「わかったよ。兄上」

しかも、ぼくの家はなぜか敬語を皆使わない。  
さすがに、王都や他の貴族の集まりの時は使うが。

（PM19：00）

「皆さん、私の息子オルツスの  
誕生日パーティーに来てくださってありがとうございます。  
今夜は息子の誕生日ですが、沢山の料理も用意しています。  
ぜひ、お楽しみください！」

父上の挨拶でぼくの5度目の誕生日パーティーが始まった。

（PM20：30）

挨拶の後ぼくは色んな村の人達と話しかけてくれた。

「大きくなったな」坊主。誕生日おめでとう

「オルちゃん、誕生日おめでとう」

「オルツス、おたんじょうびおめでとう」

などなどだ。上からおじさん達、おばさん達、村の子供達だ。  
なんて温かいパーティーだ。涙が出そう・・・

パーティー会場から1キロぐらいの場所で感動に浸っていると、  
後ろから誰かが抱き付いてきた。

「マスター私がお祝いにチューをして上げるよ」

どうやらウールらしい。

それに人型になっている。

それに、歳は10代中間くらいだな。

なんでわかるかって？それはなあゝ

ぼくの背中に大きなメロン二つが当たっているからだ！

「ウール。色々と恥ずかしいからやめて。後、皆にばれる」

「良いじゃないか、遠いし絶対見えない。

しかもいずれマスターと披露宴を挙げるんだから」

「ベシッ！」

ウールを叩いた。コイツは本当に懲りないよなあゝ

「冗談はやめとけ」

「冗談じゃないよマスター。結構本気！」

「もういいや。疲れた。」

そう言い残し、ウールを放置して屋敷に戻っていく。

行くときに

「えっ！？マスター乗ってくれないの！」

と、聞こえたがそこはスルーでいこう。スルー。

え？お前の誕生日なのに居なくて良いのかだって？

良いんだよ。村の大人達や父上はもう、お酒のせいでベロベロだし、

母上は村の女性達に色々と話をしてる。

兄上は他の子達と遊んでいるから。

いまいち、子供の遊びが分からないんだよ・・・

いやあ、そりゃね。ぼくの精神年齢は19だよ。

つぼがわからん。つぼが。

寝るか。

そう思つてパジャマに着替えようと自分の部屋に上がろうとすると・

・

「きゃあああああああああ」

村の方から悲鳴が聞こえてきた！

なんだ？何があつた！？

ぼくはあわてて家から飛び出した。

「マスター乗つてく？」

「ウール？なんで大きくなつてるの？」

そう、そこにはいつも見慣れているウールではなく。

二まわりほど大きくなつた銀の狼がいた。

今ぼく達はさつき誕生日パーティーをやっていた広場に向かって走っている。

走っているのはウールでその後ろにぼくが乗っている。

ウールはいつもの愛らしさが無くなり、

前、自分の正体を明かした時よりも真剣な表情で走っている。

ウールはかなり巨大化していて、全長が3メートル位ある。

なんで大きくなつたのかは分からない。

聞きたいが、今はそれどころでは無いだろう。  
今のウールの時速60キロ位だ結構速い。  
広場までは後2キロほどだ。

「ウール急ぐんだ!」

「OK! マスター掴まってね」

そう言うとうールはまたスピードを上げた。

ウールがスピードを上げるとすぐに着いた。  
まず、状況が分からないから、木陰で様子を見るか。

「ウール。あの木の陰で様子を見るよ」

ぼくは50メートルくらい離れた、  
見晴らしの良さそうな木を指差しウールに言った。

「分かった!」

そう言うてウールは木陰に入った。  
そして、広場の様子を見ると・・・

「何!」

ぼくは驚いた。  
そこには、多くの魔物たちがいたのだから。

そこには、沢山魔物がいた。

村の男達は戦っているが、酒のせいで思った通りに体を動かせていない。

女性達は怯えていて動けそうに無し

同じく子供達も固まっている。

でも、兄上が見えたからしばらくは安心だろう。

問題は今、最前線で戦っている、父上と母上だ。

二人は確かに強い。

だが周りに村があるから、全体に効く魔法は使えないようすだ。

二人は魔法剣を出して戦っているが明らかに押されている。

（魔法剣は属性魔力を具現化した剣。）

「グワアアアアアア！」

今、村人が魔物の牙の餌食になった。

まずいなあゝこのままだと、全滅させられる。

それに魔物はそう簡単に殺せないのである。

魔物には魂の塊憎悪があつてそれが生物の体の中に入ると、その生物が魔物になってしまうからだ。

だから、基本的に魔物を倒すときは一体に当たり二人で戦うのだ。

一人が魔物を倒し、もう一人が魔物の魂憎悪の浄化をやる。

こうしないと、倒しても逆に魔物が増えてしまうのだ。

いつもなら皆が協力すれば倒せたはずだ。

だが、今は夜陰であり、さらには酔っていて協力もくそも無い。

しかも、この村にはしばらく魔物は襲つてこなかった・・・

襲ってきたのは父上がこの村に来るずっと前だって聞いた。だから、シュミレーションと言うものが出来ていないから、こういう状況での対応が出来ない。

どうする？ ぼくには神認者しんごうの力がある。

けど、まだ普通の魔法ですら使えない

ぼくには神認者本来の力。神級魔法が使えない。どうやればいいんだ？

「マスター・・・悩んでも始まらないよ・・・

マスターが本来の力をまだ使えなくても、私の服とか造った力はあるでしょ」

「ウールの言う通りだけど。

君の服を造った力だって使いこなせない・・・」

すると、ウールはいつの間にか人型に戻っていた。そして・・・ぼくを抱きしめて、やさしく・・・

「いいじゃないですかマスター。マスターの造った

この服は万能ですよ。私が狼に戻ったら消えてるし、人になったらなぜか元通り、

しかも、いくらひっぱても爪で引っかいても切れない。凄いじゃないですか」

「・・・お前、そんな事してたのか」

せっかく造ってやったのに。

でも、今のウールの言葉を聞いて自身は出てきたな。

「ありがとう。ウール」

「はい。私はこのままここにいますね」

「ああ、助かる。危なくなったら助けてくれ」

「OKです」

こんな感じでラブコメ？をしていると、  
いつの間にか村の女性達の所に魔物が集まりだしてきた。  
どうやら押し切られたらしい。

「よしっ！」

ぼくは気合を入れると白い長剣を創造し、  
魔物達の元に駆けて行った！

## 誕生日パーティー（後書き）

どうでしたか？今回は？書いてて結構、悩みました。魔物もつと後に出そうかな〜って思っていたんですが、戦闘の描写速く書きたいな〜って思っていたのでこう言う展開になりました。

と言う事で次話はオルツスの初戦闘正和です。神級の魔法や、世界の調和者の力は出ないと思いますが、白ホワイトウェポンの武器で頑張ってもらいたいと思います。

では、最後まで読んで下さってありがとうございます。次話もよろしく願います。

## 初戦闘（前書き）

こんにちは！この日2回目の投稿です。8話書いた後にアイディアが沸いたので書いてみました。今回は戦闘です。では、お楽しみください。

## 初戦闘

ぼくは、魔物に駆けて行って、  
今にも食べようとしていたから白い長剣で首を切り落とした。

魔物は「グオオオオオオオオオ」と変な断末魔を上げ死んでいった。

「オルちゃん！」

村の女性達がぼくに気づき声を出した。

だが、ぼくはそれを無視する。

そして見たのだ魔物の背から黒い塊が出てきたのを

（あれか・・・あれが魔物の魂憎悪か・・・

見るからに悪の塊って感じだな・・・さて、どうやって消すか。

確か通常では浄化魔法を掛けるんだったよな？

でも、ぼくはそれを使えない・・・だが、消す方法はあるはずだ！

！そうだ！浄化をイメージした武器を造れば）

ぼくはそう思い、浄化をイメージした。

（浄化だ、浄化。きれいにするイメージだ。

そして、出来るだけ離れた方がいいな。

なら、銃タイプだ。使った事は無いが使えるはずだ。

さっきだって、剣を使った事が無いのに使い方が頭に浮かんで  
たのだ！）

浄化効果があり・・・連射が出来き、さらに、距離が開いていても  
当たる銃！

そうイメージすると、

ぼくが知っているような形の白い銃が左手にあった。  
それを見てすぐに黒い塊に打ち込んだ！

すると、黒い塊は見事に当たり白くなって消えていった・・・  
よし！いける。

ぼくは、魔物に近づいては斬るを続けて行った。  
どうやらこの体は前よりもスペックが高いようだ。  
体が風のように動く。

次々に魔物が倒されていき、その背中からは黒い塊が出てくる。  
ぼくはそれを狙って白い銃の引き金を引く。

やっと、最後の魔物になった。  
魔物  
そいつを倒そうと首に切りかかるが・・・

「ガツキイイン！」

「っ！」

なんと、その魔物は刃を弾いたのだ！  
その衝撃で刃は折れてしまい、  
さっきまで使っていた白い長剣は白い粒子に戻り消えてしまった。  
次の瞬間、魔物が反撃してきた。  
危うく、爪の餌食になるところだった・・・

ぼくは距離をとるように、銃弾を撃ち続け魔物から一旦離れる。  
離れながら見ると、いままで倒した魔物は熊みたいな魔物だ。  
確かに、今の魔物も熊みたいだが少し違った・・・  
その魔物には全身が光輝いている。

それは鋼鉄で出来ているようにも見える。

そんな事が分かって弱点を探そうと撃ちながら  
離れてみるが、甘かった。

魔物は銃弾をくらっても特にダメージが無いみたいで、  
撃ち続けているのを無視しそのまま突っ込んできた！  
まずい！浄化と距離しかイメージしていなかったせいで威力が欠け  
ている。

そして、ぼくは魔物に殴られた。

「ボン！」

と鈍い音を出してぼくの体は10メートルほど飛ばされ  
木にぶつかった。

「がはっ」

吐血した。

まずい！このままだと。

こうしてる間にも魔物は足に力を込めてぼくを殺そうとして来る。

魔物が動き出した。

銃もぶっ飛ばされたときにどこかにいつてしまった。

さっきみたいに銃で牽制も出来ない。

魔物が突進してきた。

ぼくはとっさにそれを横にかわした。

魔物はそのまま突っ込み木々を折りながら進んで行った。  
だが、安心がしてはいけない。  
すぐに戻ってくるな。

一つ良かった事は周りに村の人達は見えないことだ。  
魔物とやりやっている間に遠い所に来たのだろう。

これで気にしないで戦闘が出来る。  
急いで武器を造ろう！

ぼくはイメージする・・・

（全てのものを切り裂き、

どんな反動にも耐え、

魔物の血肉を喰らいその力も飲み込む

鋭き刃、強固な刃、全てを飲み込みそれを力に変える刀！）

イメージするとぼくの手には、

沢山の光の白い粒子が集まり、

徐々にその刀身があらわになっていく・・・

でも、魔物は待つてくれなかった。

そう、魔物が折り返しこっちに向かってきたのだ！

まだ刀は出来ない・・・

多くの力、さらに強力な能力を求めたため創造に時間がかかるのだ。  
魔物が迫ってくる、

「くそっ」

次の攻撃はヤバイ魔物アイツは

思いつきり爪を立てて切り裂こうとしている！

ヤバイな。刀を見るがまだ、刃先が造られていない。

絶体絶命だ！  
さあ、どうする！

魔法！

そうだ！魔法がある。

だが、どうする？

ぼくの知っている魔法は・・・

あつ、あつた！

前に父上と兄上が鍛錬した時に魔法を使っていた。

でも、出来るのか・・・

5歳児の俺には魔力のコントロールが出来ない・・・  
でも・・・

・・・やるしかないじゃないか！  
ぼくは覚悟を決め、言葉を紡ぐ。

「火よ、集まり、一つの塊になり進め！火の玉！」

そう、詠唱するとぼくの目の前には、  
1メートルくらい大きな火の玉が出来た！  
ぼくは「行け！」と叫ぶ！

すると、火の玉は進んで行った。  
魔物は行き成り現れた火の玉に驚き、

急停止し、危うくかわす。

そして、また進もうとして来る。

だが、もう遅い。

ぼくの右手には刃渡りが90センチぐらいある、  
美しい刀身の白刀が握られている！

ぼくは走る。さっきよりも速く！

向こうも突進してきているので、

すぐにたどり着く。

向こうから攻撃して来た。

爪を立てて切り裂く攻撃だ！

「ギイイイイン！」

ぼくは刀を盾のようにして爪を受け止める。

凄いびくもしない。

ぼくは刀を押し出すようにして爪を弾く。

「次は、こっちの番だ！」

そう言い、熊の魔物に切りかかる。

魔物はかわそうとするが、

かわしきれない。

そして、魔物の右腕を斬った。

「シュパ」と切れる。

魔物は距離をとろうとする・・・が、



魔物の魂は消えていった・・・  
憎悪

ぼくは今、魔物を殺した山道で寝転んでいる。  
なんで？って、動けんのだよ。

それに、さっきから違和感がある。

こう・・・なんていうか・・・

体の中心から何かが沸き出てくる感じ？

まあ、普通に気持ちが悪いと言っ事だな。

でも、どうしよう？

このまま動けないのは危ないな・・・

本当にどうしよう・・・

「マスター。終わった？」

あのバカウールの声が聞こえた。

アイツのんき過ぎだろ。

マスターって呼んでるんだから少しは助けたりしようぜ・・・

「マスター、お眠かな？」

目を開けるとそこにはウールがいた。

「おい、なんで助けなかった？」

そう、問いかけると・・・

「マスター、一人でも倒せるじゃないか」

「そう言う問題じゃねーよ」

「そう言う問題だっぞ」

よく、頑張ったね、偉い偉い」

コイツはバカにしているのだろうか？

しかも、ぼくの頭に手を置いてなでなでしてくる。

「ウール殴りたいのか？」

ぼくがドスをきかせて話すと。

「今のマスターでは無理だよ」

と、明るく返してくる。

「それよりマスター？」

「なんだ？」

「体、魔力で暴走し始めてるけど、大丈夫かな？」

ん？今なんて言った？

「カラダ、マリヨクデボウソウシハジメテルケド、  
ダイジョウブカナ？」

なぜか言葉がカタカタに聞こえる。  
そう思った瞬間・・・

「ブシャアアア」

ぼくの耳から大量の血が出てきた。

「ガアアアアアアアアア」

ぼくは激痛で叫ぶ！

だが、ウールはニコニコ笑っている。  
なぜ笑っているんだ？

まさか、コイツがやったのか？

「ほらね、マスター。」

暴走してるでしょ、今から封印魔法を掛けて上げるよ。

今、暴走している魔力は神の魔力じゃないから、  
最上級の魔法なら暴走を止められそうだよ」

そう言うと、ウールは凄く幸せそうな顔した。

その間にもぼくの体中から血が溢れだしてくる。

なんでウールは見分けが付くんだ？

しかも、最上級？誰が掛けるんだ？

だんだん、意識がなくなってきた。

すると、ウールの声が聞こえた・・・

「ヒカリヨ、ソノセイナルチカラヲモツテ、

コノモノノ、イジヨウナマリヨクヲフウィンシロ！フウィンマホ  
ウ！」

そう言って、ウールはその美しい顔を近づけてきた。

そして、そのまま・・・

ウールとぼくの唇が重なった・・・

ぼくは、びっくりしたが

それを表せるほどの余裕も体力もない。

すると、ぼくの体は光った。

上から、ものすごい重圧がかかり

失神しそうになったが、

その圧がなくなると、今まで苦しめていた痛みがなくなった。

「このまま、襲っちゃおうかな」

スッゴイ。殴りたくなったが、動けない。

緊張がとけたらなんだか、眠たくなってきた。

ぼくは睡魔に負け、そのまま死んだように眠っていった・・・

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
ウール視点

今、私は愛しのマスターの寝顔を見ながら
微笑んでいるだろう。

なんで？って。

それはね、やっと会えたんだよ。

私の求める最高のマスターが、

それに、今日は封印術で彼にキスを出来た／＼

とっても、嬉しい。

本当は体の一部を触っていればいいのだが、丁度良いチャンスだ。

そう思いながら背中に乗っている彼の方を見て言った。

「マスター。凄い心配したんだよ。ゆっくり眠ってね」

この、言葉は彼には聞こえないだろう。

だが、ウールはとっても幸せそうな顔をしている。

そして、村人達がいるだろう広場に向かって歩いて行った・・・

初戦闘（後書き）

話しの中にあつた。くくくくくくが続けているのは小説の人物
目線を主人公から他の人に変えるのに使います。よろしく願ひし
ます。

今回は戦闘でしたがどうでしたか？自分は書いていて戦闘描写で普通より凄く難しいなあゝって思いました。本当に難しかった。途中、魔法使ってしまった・・・あれしか浮かばなかったですよ。自分は本当に未熟なのでアドバイスなどよろしく願います。では、最後まで読んで下さってありがとうございました。

目覚めて・・・（前書き）

皆さん、こんにちは！三日ぶりの投稿です。今週は大変です。テストが・・・

と言う事で私情はさておき、今回は目覚めです。前回は初戦闘の後正和オルツスは魔力暴走を起こし、それをウールに助けてもらい、そのまま終わってしまったので、起きたら家族と話し合いの場面かな～
と思ったんですが・・・
と言うわけでお楽しみください！

目覚めて・・・

ん、暗い・・・

何があつたけ？

んゝ確か、

村の皆がぼくの誕生日パーティーをしてくれて・・・

あつ！そういえば、魔物に襲われたんだ！

そして、ぼくが魔物と戦つて・・・

魔物を倒して、何が原因かわからないけど

魔力が暴走して倒れたんだ。

その後すぐウールが来・・・て？

あれ？ここから記憶ないな。

しょうがない、今でも覚えている、あの激痛はやばかった。

ずっと、考えても仕方がないか。
起きよう。

目を開けた。

すると、いつもと変わらない風景があつた。

天井は木で出来ていて、ぼくの上には大きな木目があるのだ。

周りを見たが特に変わった様子もない。

下りてみるか・・・

ぼくはパジャマを着替えて、
下に通じる階段まで行く。
階段を降りると誰も居なかった。

「父上、母上、兄上、ウール。居ますか？」

こう、問いかけてみても何もかえってこない。
しょうがない。外に出てみるか。
そう思つて玄関に行く。

外に出てみるとまだ、朝日が昇っていた。
ん？朝？じゃあ、なんで誰も居ないんだ？
そう言えば今日って何日だっけ？
ぼくが疑問に頭を悩ませていると、

「おい！逃げろ！
ワーソン家の屋敷に入るんだ！
魔物が来るぞおおおお！」

「音声拡大魔法」を掛けた声が聞こえる。
え！父上

そう！これは父上の声だ！
いつもは、けして出さない叫び声を出している！
しかも、魔物が来る？
前、倒したはずだろ？
また、襲撃されたのか！

「クソッ！」

ぼくは今、父上の声が聞こえた方へ走り出す。
この方向は広場だ！
何でだ？

ぼくは疑問に思いながらも走り続ける。

そう言えば、戦闘に使った白刀まだ消してなかったな。
思い出してあの白刀をイメージして「消えろ」と命じる。
すると、前方から白い粒子が飛んできた。

あれは、ホワイトウェポン白い武器の粒子だ！

あっちに在ったのか。

確か、前は武器を造るのに時間がかかって

結構、苦戦したんだっとな。

造っておくか。

ぼくは、前の反省を生かし、

走りながらも武器を造る事にした。

前よりもいい刀を造るか。

イメージをする。

（全てを切り裂き、どんな衝撃も耐え、

生物の血肉を喰らいて自身の力に変換し、

汚れし一魂を浄化し自然に溶かす

鋭き刃、強固な刃、

全てを飲み込みそれを力に変える刃、汚れし物を浄化する刃！）
そう言葉にすると、手から白い粒子が溢れ出ている。

だが、すぐには形にならない。

やっぱり、強い力と多くの能力を持った武器は
創造に時間がかかるようだ。

今のイメージした刀は前の白刀に浄化の作用を加えた。
多分、前よりも時間がかかるだろう。

そう考えているうちに40〜60人位の人達が見えてきた。

「坊主！なんでそこにいるんだ！

しかも刀の柄なんて持って、

あぶねえから屋敷にいる！ほら、こっちに来い！」

逃げていた村人の中からおじさんがぼくの肩を掴みながら言う。
る。

だが、じつとはしてられない！

おじさんの手を払って

「ごめん、おじさん。

だけどこれは、ぼくの意味だから

それと、家族の皆は戦ってるでしょ？」

「そりゃ〜戦ってるけど・・・お前の行くところじゃねえ！」

「じゃあ、余計に行かなくちゃならない」

そう言って走り出す！

「おい！坊主！」

「おじさんは速く屋敷の中に！」

振り返り叫ぶ。

そして、全力で駆ける！

不思議な事にあの村人達以外の人を見ていない。
なにか遭ったのか？

考えていると突然！

「きゃあああああ！」

悲鳴が聞こえてきた。

「クソッ！」

その声は今走っているところから
東の方向に聞こえてきた。

ぼくは止まって悲鳴のする森の中へ
急いで駆けだす。

そこに着いた。

木々がなく岩場になっている。

岩に隠れて見ると、3〜5メートルぐらいの

ドラゴン型の魔物がぼくと同じ位の歳のきれいな赤髪の少女に襲いかかっていた。

ちっ、まだ白刀が半分ほど出来上がっていない。
どうする？

そうだ！新しいのを

ぼくはそう思い、左手に力を込め一本の白いナイフを創造する。
そして魔物ドラゴンの左胸目掛け投げる。

あのナイフはなんでも突き通せるってイメージした。
ナイフは予想通りドラゴンの左胸を貫通する。
そしてナイフは岩をも貫通し、
その後ろに広がる森の中に消えていく。

消さないとまずいな。

そう思ったぼくは「消えろ！」と命じる。
すると、ナイフが飛んでいった方向から白い粒子がくる。

この場には怯えた赤髪の少女と、
さっきの魔物の魂憎悪が残っている。
ヤバイな。少女に取り付く！

ぼくはすぐさま、浄化の銃を造りだす。
「パーン！」

銃声を鳴らし、魂をぶち抜く

撃ちぬいたそれは白くなって消える。

あの子、大丈夫かな？

「大丈夫かい？怪我とかない？」

心配そうに聞いてみた。

「うん、だいじょうぶ・・・」

ひどく怯えてる。

まあ、さっきのに襲われたら恐いだろう。

どうしようか、広場に行かなくちゃならないけど置いて行くわけにもいかなし、

一人で屋敷に行かせるわけにもいかないな。連れて行くか？

多少危ないがこれが、一番いいな。

あつ！名前聞いてなかったな。

「ねえ、君の名前教えて？」

「なまえ？・・・エリー。あなたは？」

名前か、偽名使うか？

いいや使う必要もないな。怪しまれないし。

ちなみにこの世界では、貴族ではない家系は苗字をもたない。

「エリーか、わかった。ぼくの名前はオルッスだよ。ところでエリー。」

「ここは危ないから移動するけど歩ける？」

「うん。オルツスね」

「そう、じゃあ行こうか」

そう言つて、エリーと歩き出す。

スピードはかなり遅くなるが安全のためだ。

「エリー、ワースン家の人達がいるのはどこ？」

「戦つて私達を逃がしてくれた人達だね。」

あっちだよ」

エリーはその方向を指す。

やっぱり気づいてないか。

みて見ると、エリーはぼくの予想通り広場の方に指した。

やっぱりか、確かあそこは村の外れの洞窟に近いんだ。

そこから進入したのか。

まだ、魔物がいるって事は

洞窟で湧いた魔物が食料を求めて人の多い村に来たって事か。

「ありがとう、エリー。」

向こうに着いたら君の周りに魔法掛けるから動かないで

じっとしててね」

「どこかに行くの？」

「うん、ちょっと戦っただけさ」

そう言うとなぜか黙ってしまった。
なぜだ？

こう話しているうちに新たな白刀は出来ていた。
この白刀は前のに比べ10センチほど刃が長くなり、
柄も合わせると110センチぐらいある。
長くしたのは浄化するときに長い方が
リーチが伸びてやりやすいためだ。
今度は鞘も造った。
今は鞘に入っている。

10分ほど歩くと森の木々の間から光が見える。
着くな。

ここから広場が見える。
そこには、恐ろしいほど沢山の魔物の死体があった。

ぼくはエリーの視界に死体が見えないように
エリーの視界を体で塞ぐ。

「エリー。ここに居て、
大人しくしててね。今から魔法掛けるから」

エリーは小さく頷く。

ぼくは魔法を掛けようとするが・・・
気になる事が出てきた。

前、

「魔法を使っただけから魔力が
暴走したのではないかと言っ事である・・・」
そう言えばそうなのである。

基本的に体内の魔力を操れるようになるのは6歳からだ。
だが、ぼくは5歳。
当然、天才でもないぼくは魔力が暴走するわけだ。
こう言う事なのか。これなら意味がわかる。

どうするか・・・
あっ！そうだ。これを使うか。
左手を出し、指輪を創造する。
これに込めた能力は魔力の吸収と
吸った魔力で持ち主の身体の傷の回復だ。
ホワイトウェポン
便利だな白の武器。

これでOKだな。
ぼくは造った白い指輪を左手の中指にはめる。
すると、つけた瞬間から魔力を吸収し始めた。
キツイな。
だが、これで大丈夫だ。

「じゃあ、掛けるよ」

「わかった」

知っている魔法は火の玉だけだ。

だが、これを応用すれば魔法は作れるはずだ。

作る魔法は、あくまで守るためのものだ。

だから、バリアー系の魔法だ。

思いついたままにぼくは詠唱する。

「火よ、燃え広がって壁となり、通る全ての物を燃やせ！火の壁！」

そう言うと、ぼくとエリーの周りに厚い火の壁が地面から噴出してきた。

中は半径3メートルほどだ。

この火はぼくの意識が無くなるか「消えろ」と命じない限り消えない。

これなら大丈夫だな。

「エリー、ぼくは行くけどここから出ちゃ駄目だよ。

もし、この火が消えたらワースン家の敷地に全力で走るんだわかった？片付いたら戻ってくるから」

優しく話しかけると、コクコク頷いてくれた。
よし、行くか。

そして、オルツスは再び戦いに向かう！

目覚めて・・・（後書き）

本当は今回の話をちよつと明るい感じでいこうと思ったのですが、そこに入るまでのイメージがわかなかったので前話に引き続き、戦闘っぽい感じになっちゃいました。すみません。

なので、次回も戦闘です！次はワールソン家VS魔物。みたいな感じで書こうかなと思っているところです。この戦いが終われば、話し合いみたいでしょう。オルツス正和の白ホワイトウェポンの武器の事とかですね。後、その他モロモロです。

ちなみに、今回出てきた。赤毛の少女はヒロインになるかも・・・最後まで読んで下さってありがとうございます。感想、一言もよろしく願います。

魔物（前書き）

皆さん、こんにちは！まず、謝罪を投稿遅くなってすみません・・・
11月30日以来です。本当にすいませんでした。

では、今回の話しの説明をこの話は前回の予告では、「ワースン
家VS魔物たち」みたいな感じだったのですがずれてしまいました。
12話の準備みたいなものです。それでは、11話「魔物」お楽し
みください！

魔物

ぼくは、素早く魔物^{ドラゴン}に駆け寄り
首を切り落とす。

「グアアアアアアアア！！！」

と赤い魔物^{ドラゴン}が苦しそうに倒れる。

ぼくは、血が付いた白刀を振り刀身の血を払い、
倒れた魔物から出てきた魂^{憎悪}に白刀の側面を当て、
浄化させて消す。

「くそつ、きりがねえゝな」

もう、30分経っただろうか。

ぼくは、エリーを置いてきた木の陰から

10メートル程しか進んでいない。

あそこから出てきた瞬間に100体程の魔物に襲われたのだ。

休まず、ぶつつけで倒しても

目の前には50体を超える魔物がいる。

父上や母上、兄上の戦闘音は聞こえるのだが

これじゃあ、いつまでもたどり着けない。

もともと、この広場はかなり広い。

面積は5平方キロメートルぐらいあり、
ここから中央を目指すには2キロほどある。

さらにこの大勢の魔物が目の前にいる。
時間がかかり過ぎる。

とにかく、この魔物たちを倒さない限りは行けないか・・・
手っ取り早く倒せないか？

「・・・！武器を変えるか」

その口に出し、白刀を鞘に戻して腰に白刀を挿し込み両手を前に出す。

魔物たちは、何かが来ると感じ取ったのか、身構えている。

気にしないで、武器創造に集中する。

イメージすると手からは、白い粒子が出てきて形を成してゆく。

10秒もすると、両手には大型の銃が握られていた。

魔物たちは何もない所から出てきた事に驚き、動けないでいる。

狙いはつけずにただ魔物たちの中心に銃口を向ける。

そして、「パッーン！」と両手同時に引き金を引く！

魔物たちは飛んだりして逃げようとする・・・

が

そのたった二つの銃弾は、
空中で2000発程に分かれ、50数体の魔物たちを一斉に襲う。

今、造った銃は散弾銃だ！
ショットガン

しかも、銃弾を細かく1000以上に散弾するようにした。
そして・・・

「グアアアアアアアアアアアア！！！！！」

2000発の弾幕は、そのまま魔物たちにぶち抜き、その、風穴からは白い光が見え魔物の体内ではじけ飛ぶ。

ほんの10何秒で先ほどまでは50体以上の魔物たちがいた地には何も残らずただ、無数の小さく白い銃弾が散らばっていた。

「なかなかの威力だな」

感心しながら握っている散弾銃を見る。
ショットガン

当たった後に体内に残り続ける銃弾をイメージした。

だから、当たった銃弾は魔物の体内で中心部まで潜り込み、
その浄化の力で魂を消し去ったのだ。

効果は絶大だ。

あれ程いた魔物たちを一気に消せたのだから。
これの欠点としては、近くに仲間がいると使えない事だけだ。

あつ、関心してる場合じゃなかった。

そう思い出し、ぼくは未だに戦闘の音が聞こえる
広場の中央を目指し走り出す・・・

しばらく走っていると、広場の中央が見えてきた。

「っ！？なんだこれは・・・」

そこは、いつもの青々しい緑が生い茂っている
イメージはなく周りの木々は枯れ落ち、地面には無数の穴が開いて
いる・・・

「どういつことだ・・・？」

そうか！

そういえば前、ヘルシスさんが言っていたな。
たしか・・・

結界を張らずに魔法を使うと、

空気中の魔力

マナ暴れだして自然破壊を起こすって。

きつと、行き成り魔物たちが襲撃してきたから、

結界を張る余裕が無かったんだ。

ぼくも、張らずに『火の球』使ったし・・・

ぼくは、前の前の風景に驚きつつも、

激しい戦闘音の聞こえる方へ足を運んでゆく。

「ボオオオオオオン!」、「グアアアアアア!!!」

など激しい音も聞こえてくる。

結構恐い・・・

そんな音に警戒し白刀を抜いて戦闘状態になる。

ショットガン

散弾銃は走っている時に戻した。

ゆっくりと歩いていくと、やっと母上たちが見えてきた。

「っ!」

ぼくは、驚いた!

なんと、母上たちは数えられないほどの魔物たちと戦っていたのだ!

しかも、ぼくが今まで倒して来た

4〜5メートルほどの魔物ドラゴンだけでは無く、

中には、10メートルを超す

大型の魔物ドラゴンまでいるのだ！

ぼくはそこへ行こうとすると・・・

「あなたああああ！これじゃあ、きりがないわ！
私がぶっ放すからジルの近くに行って結界を張って！」

焦っている母上の大声が聞こえてきた！

しかも、いつもは使わないような言葉を放ちながら。

「わかったマリア！

ジル、こっちにこい！母さんの魔法をくらうぞ！」

と、父上が母上にそう答え、兄上を呼んでいる。

「わかりました。父上！」

兄上が父上に駆け寄って行き、父上の隣に着く。

「ふ〜」と呼吸を整えた父上が、

『魔力よ、他の魔力を拒絶し、

全ての力を遮断し、壊れる事なき壁となれ！結界魔法！』

と、上級の結界魔法の詠唱をし、結界を張る。

結界は、基本的にはマナのある空間から区切る

空気中の魔力

壁を張り、中に別空間を作り魔法を使用した時の<ruby><rb>

マナ</rb><rp>(</rp><rt>空気中の魔法</rt><rp>)</rp></ruby>の暴走による自然破壊を防ぐための魔法だ。

それと同時に、結界魔法は外部からの魔力を遮断する事も出来るので、

広範囲の魔法で絶対に避けられないような攻撃にはこれを使うとうまく切り抜けられるのだ。

あ、忘れてた・・・

・・・母上の魔法のこと！

やばい、母上の魔法は・・・

ぼくはそう思ってた慌てて

その場から逃げようとする・・・

『聖火よ、その清き光の炎で、

全てを燃やし、全てを原点に戻せ！原初の火』

母上が詠唱をした。

すると、母上の体から

金色に輝く炎の輪が波のように周りに広がっていく。

その炎が魔物に当たると、一瞬で炎に包まれて焼け消えた。どうやら、あの炎にも浄化の作用があるようだ。

倒した後^{憎悪}に魂が出ない。

ん？何かを忘れているような・・・

こっちに来るじゃねえか！

やばい！

どうする？もう少して当たるぞ！

「ああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

そうだ！

大量の魔力で金色の炎を相殺する！

そう考え、ぼくは左手にはめてあつた
白い指輪を外す。

それと同時に・
・
・

「アアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！
っ！がはっ！」

「ブシャアアアアアアア！！！！！」

いままで魔力の暴走を押し留めていた
ストッパー
指輪が外れ、

激痛と共に体中の血管が破れ、

血が噴出し、血と一緒に大量の白い魔力が溢れ出てきた。

吐血もしてしまった。

しかも前より、暴走が酷い。

ぼくはその魔力を朦朧もろうつとする意識の中で
自分の体の前に魔力を集め、盾にするように魔力を厚くし、

倒れこまないように白刀を杖のようにして体を支える。

魔力の盾を作り終わると同時に、
母上の金色の炎が盾にぶつかる。

「ボワアアアアア~~~~~！」
と音をたてながらお互いの力を削ぎ落とし合う。

互いに力を消し去りながら、
威力が無くなるかのように色が段々透明になってきた。

やがて、金色の炎は消え去った・・・
ぼくの白い魔力の盾は消えて無くなっていた。
フラフラしながら、外した指輪を再び左中指にはめる。

指輪をはめると体が光り始め、いままで溜まっていた魔力で
傷を治しはじめる。
ぼくは片膝を地面につけ、辺りを見回す。

「なんだ・・・と！」

なんと、そこには先ほどまでは数えられないほどの
魔物たちがいたのに、今の一撃で全滅したのだ。
なんて破壊力だ！
母上の強さに驚いていると、

「あなた、耐えれた？」

母上が問いかけると、

「いやあゝ、相変わらずの威力だね。

危うく消えかかったよ、ジルは気絶しちゃったし・・・

これで、全滅させたみたいだけど」

父上が苦笑いしながら「あはは」と言う・・・

「あら、気絶してしまったの？ジルもまだまだね。
オルツスは耐え切ったのに・・・」

「っな！」

「っ！」

気づいているのか・・・！

さすがは母上だな。

「あなた。オルツスは私の20メートル程、
後ろにいるわ。でも、動けないでいるからつれて来て下さい」

「そうか・・・オルツスが来ていたのか、わかった」

そう言うのと、兄上を抱えた父上がぼくの所に来た。

「大丈夫か？オルツス」

「はい。何とか」

「そうか。じゃあ、マリアの所へ行くぞ
少し痛むと思うが、我慢してくれ」

「わかりました」

こう、やり取りをすると父上は抱えている
兄上を左肩に乗せて、
次にぼくを抱えて、丁寧に空いている右肩に乗せる。

「痛っ！」

「ごめんなあ。我慢してくれ」

そう言つて、父上が母上の元に歩いていく。

今、ぼくは母上の前に正座している。

「オルッス？ここは危ないのにどうして来たの？」

「すいません」

「ハア、」

絶対にこれ以上の答えは返つてこないわね」

「・・・」

「そう、わかつたわ。

それが、あなたの意思なら構わないわ。

それより、もう少ししたら今、倒した魔物たちの
ボスが来るけどそれでも残る？」

「はい！残ります」

「うん。合格！」

と、母上が満足そうな顔をして笑顔で言ってくれた。

「それより、あなた。

デカイ魔物が来たら、上級の『結界魔法』を張ってくださいね」
「わかったよ。それより魔力は大丈夫かい？」

あの『原初の火』は最上級の中でも下位の魔法だけど、
一応、最上級何だから。気をつけないと、魔力切れで倒れるぞ」

やっぱり、多く魔力消費をしてたのか

母上のいつもの覇気と言うか、

プレッシャーみたいなのがかかってこないから

そうかなって思っていたけど・・・

「大丈夫よ。たしかに、結構きついけど。

しょうがないでしょ！」

あなたと結婚したから引退したはずなんだけど・・・

そのあなたに泣きつかれて、頼まれたら頑張るしかないでしょ！
帰ったら覚えておいて下さいねっ！」

「ああ、しっかり覚えておくよ」

何だろう。

この父上と、母上の周りに漂っているピンク色の空気は・・・
なんでこの二人は、こんなにもラブラブなんだ？

「オルツス。変な事を考えるな

父さんとマリアはこんな感じだぞ。

このくらいで引いてもらっては困る」

父上がドヤ顔で結構気持ちの悪い事を言ってくる。

いつもの威厳はまるでない・・・

「アーサー、駄目よ。

そんな事言つてオルツスを引かせたら。
それより、来るわよ準備はいい？」

母上がそう言つと、

2キロメートル程前に、

20メートル位の黒と赤が混ざつたような色のドラゴンが
やって来る。

「ああ、OKさ！いくぞ、

『魔力よ、他の魔力を拒絶し、

全ての力を遮断し、壊れる事なき壁となれ！結界魔法！』」

そう、父上が詠唱をすると透明な結界が魔物と
ぼく達の周りを囲む。

さあ、本格的な戦闘の始まりだ！

そう言えば・・・

ウールは何所だ？

魔物（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございました。どうでしたか
今回は？

マリアはかなり強いです。特に攻撃魔法が、アーサーは「結界魔法」
のような特殊な感じの魔法が得意です。しかも、二人は未だにラブ
ラブ。もう、最強コンビですよ〜

今回、ウールはお休みです。次ぎ出るかな？ってな感じです。

今回は、魔物たちのボス。あの20メートル以上の赤黒いドラゴ
ンとの戦闘です。

では、次回の投稿は15日から20日くらいだと思います。それ
より早まるかもしれませんが。感想、一言お待ちしております。お
願いします！次回もよろしくお願いします。ありがとうございます
た。

さて、ウールはいたい何所にいるのか・・・？

親の強さ（前書き）

皆さん。いつも、見て下さってありがとうございます。yuyuya
sです。

さあ、12話です。今回はアーサー、マリアが活躍？です。
では、お楽しみください！

親の強さ

ウールは何所だ？

居ないんだ。ウールが・・・

おかしい。

今さっきまでは広場^{ひろば}に居ると思っていたんだ。
父上や母上と一緒に戦っているのかと・・・

だが、いない。

あのウールの事だから心配は要らないと思うが
やはり、心配でしょうがない。
すると、母上が・・・

「オルツス！戦う前にぼつとしてちゃ駄目よ」
「ごめんなさい。母上」

ぼくは、すぐに意識を切り替える。

「うん。素直でよろしい！じゃあ、作戦会議ね。

もう、魔物が近くによって来ているから簡単に言っわね」

「わかったよ。マリア」

「わかりました」

「まず、私が・・・」

母上がたてた作戦はこうだ。
まず、母上がさっき使っていた『原初の火』の詠唱破棄で
先制し、その後に父上が『束縛の水縄』という『束縛魔法』を掛けて
残りのぼくと母上でフルボッコにすると言う作戦だ。
単純すぎる・・・うまくいったら奇跡だな。

ちなみに『詠唱破棄』とは、
文字通り魔法を行使するために言う詠唱を言わないで
魔法を使う事だ。

これを見ると、相手に隙を見せる事なく連続で魔法攻撃を行える。

だが、これには欠点がある。
それは、使うと普通に詠唱を唱えるより
魔法発動の魔力がかなり多くなる事と、
イメージが難しくなり、魔法失敗や、威力の減少が起きる事だ。
『詠唱破棄』は、かなり難しく、
超一流の魔法使いでないと何も変化無く終わるのだ。

こんな作戦会議？をしていると、
あの、全長20メートル強の赤黒い魔物ドラゴンが500メートル先にいる。
戦う事に興奮しているのか、大きな口からは火炎が吹き出ている。

「そろそろね。いきますよ！『原初の火』！」

母上がそう叫ぶと、さっきよりは小さいが

それでもどんなものでも焼き尽くす威力を持っている金色の炎が
ドラゴン
魔物に襲いかかる！

（よし！これで父上が『束縛魔法』を掛けて
ぼくと、母上でボコレバおしまいだ！速くやってウールを探さな
いと！）

ぼくはそう思い、次の行動にすぐに移れるように
ドラゴン
魔物に駆けて行く。

・・・だが・・・
そんなに甘くは無かった・・・

バッサ！

と、100メートルほど上空に飛翔した。

「！つつ」

母上の『原初の火』は、音速は出ているはずだ。
ファイ
魔物はそれをかわしたのだ。

さすがに、単純すぎたとは思ったが
こつも、あっさりかわされるとは・・・

まだ、魔物との戦闘は少ないものの感覚でわかる。

（この、魔物。強い！）

ぼくが驚きで身動きがとれないでいると。

「オルツス！一旦戻れ！そこじゃ、狙われる！」

父上の声が聞こえた。

かすかに声に軽い震えがある。焦っているのだ。

ぼくは、「ハッ!」とし

その指示に従うようにいち早くそこから離れようとするが……

ボオオオオオオオワアアアアアアアア！！！！！！！！

と前方の空から強烈な音が聞こえる。

ぼくは確かめるようにその方向の空を見ると、
ドラゴン
魔物が炎を上空から放ってきたのだ！

（ヤバイだろ。あれは！）

上空から放ってきた炎は範囲が広くとも、かわせるような攻撃じゃない。

「オルツス。伏せて！」
「水弾すいだん！」

と、母上が詠唱破棄で水属性の魔法を撃ってくる。
ぼくは、言う通りにその場に伏せる。

次の瞬間！

水魔法『水弾』は魔物が放った炎に直撃した！

シューウウウ~~~~~

と水と火が当たりぼくの周りは水蒸気で何も見えなくなる。

（今は、魔物からは見えないはず
アイツ

父上の所に行くのは今のうちだ！）

そう思い。人影が見える方へと駆ける。

「大丈夫か！？オルツス！」

近くに行くと父上が心配しながら駆け寄ってきた。

「はい、大丈夫です。父上」

「良かった。父さんは、母さんの所へ行って
援護するけど、どうする？」

「ぼくは、ここで魔物に遠距離で攻撃します」

ぼくの発言に父上は顔をしかめる。

それもそうだ。今、ぼくは何も持っていない。

遠距離で攻撃できるわけが無いのだ。

だが、ぼくは持っていないなくても
ホワイトウェポン
白の武器があるのだ。

造れば所持していなくても攻撃は出来る。

「遠距離？どうやってする？何もないだろ」

「大丈夫です。父上。それよりも母上の所へ」

「・・・納得はいかないが・・・わかった。後で話を聞かせるよ」

「わかりました」

そう言つと父上はまだ不思議そうに顔をしかめ
苦笑い？をしている。

そのまま「頼んだぞ」といい、行ってしまった。

どうやら父上が母上の所へ着いたようだ。

ついた途端に二人は連携技を繰り出している。

父上が来るまで母上は一人で魔物と戦っていた。

若干母上が押されていたが今では逆に押している。

一応、攻撃の為に追撃機能の有る短槍を創造したが・・・

（ぼく、戦わなくてもいいよね・・・？見てよ・・・）
 戦闘を見ていてイジケタぼくは、そのまま短槍を消す。
 ショートランス

ぼつとしながら戦闘を見ていると

耳が張り裂けそうな程の爆音が聞こえた。

バ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ン
ン
ン
！
！
！
！
！
！

(耳千切れる・・・)

これ比喻じゃないよ、マジで鼓膜破れるから！

激しい爆発の余波が周囲に広がる。

余波だけが残っていた木々は吹っ飛んでいった。

（父上と母上、環境のこと考えてるのかな？）

今の爆発は、父上と母上が『連携魔法』を掛けて出来た二つの炎が爆発したものだ。

炎は、金色の炎は、母上。紅蓮の炎は、父上だ。

ちなみに連携魔法は二人以上の魔法使いが集まり、お互いに同属性異種の魔法を掛け、相乗効果で双方の魔法威力や効果を上げる高等な魔法だ。

しかもこれには条件があり、掛ける人が自分と魔法性質が似通っている事と、魔法のレベルが同じ位で無いと駄目だ。

『連携魔法』に掛かった魔物は当たった瞬間に皮を焼かれて貫通し、

そのまま、金色と紅蓮の炎が体内に広がり、行き場を無くした炎の塊は

外へ押し出されるように魔物の体中から色々な方向に爆発し、花火のように魔物の血肉が砕け散らせた。

あゝ、少し勿体無いような気がする。

だって、あの魔物の強さは上位に位置している感じだったし、元々、魔物は浄化すれば死体からは

鉄鉱石や、牙、角、目、毛などその他もろもろの素材や肉などの食料も確保できる。

しかも、この世界の魔物は二つに分かれるのだ。

1つは知性が無く、自分に植付けられている本能のみで行動する。これは、何も考えずに他の生物を見ただけで襲ってくる馬鹿だ。

もう一つは知性があり、本能はあるものの自ら考えて行動する。

この種の魔物は人に懐く可能性がある、

知性を有るが故に自分よりも格上の相手だと従う。

魔物の身体を魂を浄化する時に壊さなければの話したが・・・

今の魔物はドラゴン型の上位種だ。

だから、知性を有り合わせており、従える事が出来たのだが・・・

魔物の体は魂と共に粉々に砕け散った。

砕けたお蔭で素材も取れない・・・

ドラゴン種の素材は価値が高いのに。」

うゝん、実に勿体無い。

しかし、本当に出る幕ねえじゃねーか・・・

しばらくブルーな気持ちでいると
魔物を倒した二人はお互いに喜び合い、
抱き着いてその場にピョンピョン跳ねている。
ラブラブですな！

二人がデカイ魔物ドラゴンを倒して、
しばらくしても二人は抱き合っている。
場所考えようよ・・・
居る意味が無い・・・
つか、忘れられてない！？・・・

しかし、呆気なかったな。
二人で協力しただけで倒せないだろ。普通・・・
これが親の強さというものか。
最強だな。

二人のラブラブが終わると、
どちらとも顔を赤くしてやっと、こっちに気づいたようだ。
すると父上がバツの悪そうな顔をして、

「ごめん。忘れてた・・・帰るか」
やっぱり忘れてたのか・・・
言われると悲しすぎる。

だが、悲しんでいる場合じゃないんだよそれが・・・
森にエリーを置いてきているし、
何よりもこの場に居ないウールが心配だ。

「すみません、父上。」

「ぼくはもうちょっとここに残ります」

「なぜ残るの？危険じゃない？」

母上が首を傾げて聞いてくる。

「はい。危険なのはわかっています。」

でも、約束をしたのでその約束を守りに。
後、ウールがないので探しています」

「どうせあなたは止めても行くでしょう？オルツス？」

「はい」

「そうか。オルツス気をつけろよ。」

マリア。屋敷には村のみんなもいるから速く戻るか」

「わかりました、あなた。気をつけてね。」

「はい。母上！」

こう言い残すと、母上たちは兄上を連れて屋敷へ帰っていった。

まず、エリーか。

ぼくは、素早く優先順位を決める。
最初はエリーだ。

ぼくは、駆けて来た道に戻った。

しばらく走ると、

ぼくの作り出した炎の壁が勢いよく燃えていた。
炎の壁の前に立って・・・

「消えろ」

そう言っていると炎は四方に飛び散った。
すると、中から

「オルツス」

と言いながら、赤髪の少女がぼくに抱き付いてきた。

「ど、どうしたの急に／＼」

「恐かったの。周りは火で囲まれてるし・・・
一人ぼっちだったし・・・」

一人ぼっち・・・か、悪いことしたな。

「ごめん。エリー、一人にして・・・」

「いいよ。約束、守ってくれたから」

何だろう。この子、めっちゃ可愛い／＼／
いかん。雰囲気流されるわけには・・・

「エリー。ここは危ないから屋敷に行くよ」

「わかったよ」

急がないとな。

二人は再び走り出す。

やっと、屋敷に着いた。

エリーの親もいた。

事情を説明した。（ここに来る前に見つけた。と言う事にしたが）
すごい頭を下げられたけど、助けるのは当然じゃないのか？
まあ、いいか。

それよりウールだ！

ぼくは、広場に向かってまた走り出す。

広場に着いた。

ウールは居ないな・・・何所だ？

（ます、たー、た、す、けて・・・）

！なんだ？今の声！

頭から聞こえてきたのはウールの苦しげな声だ。

それと同時にウールの場所がわかった。
あの、赤黒い龍が出てきた。洞窟だ。

やばい。今の声は明らかに攻撃を受けている。速くしないと、手遅れになる。

ばくの判断は速かった。
魔力の暴走を抑えている。左手の指輪を外す。
すると、

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！」

またもや激痛が襲う。

だが、ぼくは気にしないで魔力を背中に集める。
シューウウウウウウウ！！！！と魔力が集まる・・・

背中に魔力が集まっていく・・・

体中は血でベッタリしていて真っ赤だ。
そして何より、ぼくの背中には・・・
天使のような純白の翼が二つ、背中に備わっているのだから。

そのまま、純白の大きな翼で空気をかき分け空を飛ぶ！

「ウル……………待ってろおおおおおおお……………!!」

親の強さ（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます。今回の話はどうでしたか？私としては、魔物弱くし過ぎちゃったなあ～って感じですよ。魔物の名前などは、主人公が子供なので出していないません。読みづらくてすいません。単に、主人公が知らないという設定だからです。旅を出るころにはちゃんと名前を出します。

後、2～5話書いたら途中設定を入れさせてもらいます。ここでちゃんと名前を出します。（魔物の）

次話は、ある人の視点から入ります。その後に、オルツスVS？??です。

ぜひ、次回も見てください。感想、一言お待ちしています。よろしくお願いします。ありがとうございました。

思い・・・（前書き）

皆さんこんにちは！ y u u y a s です。 いやあ、今日24日はクリスマスイブです！

明日はクリスマス。 皆さん、メリークリスマス！

今年は速かった、実に時間が経つのが速かったです。

さて、挨拶はここまでにして今回の説明を・・・今回はウール話です。 書き方が難しかったです。 時間は前回から少し戻ります。 あんま変わらないですけど・・・

では、お楽しみください！

思い・・・

~~~~~  
ウル視点

「ハア、ハア・・・っ!!!!」

私は息を切らしながら、魔物の攻撃をかわす。  
魔物の攻撃は地面を砕く。

今の状態は獣化しており、  
マスターにもらった白いワンピースが  
出ていないため当たれば簡単に粉碎する。

魔物は私に隙を<sup>すき</sup>与えないように  
さらに攻撃を繰り返してくる。  
私は当たらないように必死で避ける。

今、私の目の前にいるのは  
Sランクのドラゴン型の魔物、「デモンドラゴン」です。  
特徴は20メートルを超える巨体に赤黒い色の体。  
「デモンドラゴン」は子に当たる「デビルドラゴン」と  
洞窟などに群れを作って生活する。  
だから、洞窟の中には多くの仲間がいるはずなんだけど・・・

辺りには見当たらない。  
なんでだろう？

昨日の夜、私はマスターの誕生日パーティーに起きた  
魔物の大量発生で嫌な予感がした。  
模索してみたら、  
いつもは洞窟の周りには多くの  
「デビルドラゴン」がいるはずなのだが  
この日に限っては居なかったのだ。

私は直ちに洞窟の中に入ろうとしたが  
マスターが心配だったので戻ることにした。

村に戻ると先ほどまで沢山居た熊型の魔物  
「バーサーカー」が数体、死体となって転がっていた。  
周りに人がいない事を見るにどこかへ非難したようだ。

その後に私は「鉄熊」に魔法を使っているマスターを目撃し、  
背後から付いて行った。  
マスターは「鉄熊」に止めをさしていた。

でも、彼はまだ制御出来ていないのに魔法を行使したため、  
魔力の暴走を起こしていた。

私はすぐにマスターの魔力暴走を最上級の「封印魔法」を使い止めた。

マスターはそのまま意識を失い、

私はマスターを彼の部屋に運びそのまま寝かした。

本当は色々したかったけど、

私とて気を失っているマスターを襲うほど勝手ではない。  
だから、

「起きたら色んな事しましょうね。マスター」

と言った。

言ったら顔をしかめていたけど、そこはあえて気にしない。

マスターを部屋に運び私の心配事は無くなったから

再び、あの洞窟に行きました。

村からしばらく行くと「デビルドラゴン」が、うじゃうじゃいました、  
が、

私は隠れていたため知能が無い「デビルドラゴン」には見つかりませんでした。

あの大群はなんだったのでしょうか？

私は疑問に思ったが気にせず洞窟へと向かって行きました。

そして、洞窟の中に入り奥へ行くと

2体の「デーモンドラゴン」がいた。

私がこの場所に着くと行き成りブレスを浴びせられそれをかわしたら、1体に逃げられてしまいました。何所に行ったんだろう？

で、今戦っているのはもう1体の「デーモンドラゴン」です。私はマスターの封印魔法で大分魔力を消費してしまって体が思うように動きません。かなりピンチです。

と言う感じで現在の状況に至ります。

ずっと攻撃を避けているせいで体力も残りわずかで昨日の夜のマスターに掛けた魔法で

使った魔力も回復していないため使えろとしたら上級1回。

人型に体を変えるのにも多大な魔力を使うため

人型にはなれない。

本当にヤバイです。

そんなことを思っていると「デーモンドラゴン」は火を噴いてきました。

私は横に飛んで避けます。

火が当たった場所に目をやると、岩が溶けていました・・・当たっていたら・・・狼の丸焼きが出来ていましたね。

すぐに「デーモンドラゴン」に視線を戻すと

火を出した反動が何かで首がから空きになっていました。  
私はこのチャンスを逃すまいと  
疲れ切った足にムチをうち、  
走り出します。

今の私には攻撃手段は噛みつくか、  
爪で切り裂くか、魔法を使うか・・・  
一つ目と二つ目は効果が無い。  
ドラゴン系の魔物のは物理系はあまり効果が無いため、  
よっぽど・・・マスターのあの白い刀があれば大丈夫ですけど。

と言う事で、残りの手段は魔法攻撃しか残されていない。  
もう、魔物は体勢を持ち直しつつある。  
時間にしてあと・・・5秒！  
瞬時にやるしかない。  
無詠唱で！

私は獣化した状態で魔法を無詠唱し、  
口の1メートル前に氷のドリルを作り出し  
「デーモンドラゴン」に放つ！

私の放った魔法は  
そのまま「デーモンドラゴン」の首に進んでいく・・・

だが。

「デーモンドラゴン」は行き成り首を回し、氷のドリルに向かって火を噴いた！

氷のドリルは火に溶かされ、

火はそのまま私に向かって進んできた。

（っ！やばい。かわせない）

そして・・・

「クウウウウウ~~~~」

火は私を焼く。

[illegible]

シュウと体の火が小さくなっていく……

ところどころその美しい銀色の毛は焼け焦げている。

「デーモンドラゴン」はウールのその姿を見て

さらに攻撃を加えようと何かを放とうとしていた・・・

ウールは今のダメージや疲労のせいでピクリとも動けなかった。しかも、意識も朦朧としている。

でも、それでも、その朦朧と意識の中で必死に生きようと助けを求めていた・・・

一緒に過した時間は短いが、

彼女が好意よせている

あの・・・少年に・・・

(ます、たー、た、す、けて・・・)

この助けはマスターに伝わったのだろうか？

私は心の中で助けを求めているながらも、

マスターにはここに来て欲しくないと思っている・・・

私はやっと見つけた。

大切な人を。

なのに、なんで、こんな速く、離れないといけないの・・・？

「デーモンドラゴン」はまだ、攻撃の準備をしている。

きっと、最大威力で技を放ち、私を跡形も無く消すのだろう・・・

私は朦朧とした意識の中であきらめていた・・・

今、この状況を打破しても  
この状態では私は助からない・  
あの人と一緒の道は歩けない・

ごめんなさい。

とウィルは謝る。

マスターにとって私はそこまで大事な存在ではないと思うけど、彼はきつと・・・悲しむ。優しい人だから・・・

（本当にごめんね。マスター）

意識は段々と薄く・・・

「ウル……!! 待ってろおおおおお!!……!!」

（あれ？この声。マスターの、声かな？）

そして・・・ウールは意識を手放した・・・

## 思い・・・（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます！どうでしたか？  
私は書くのに大分悩みました。本当に・・・感想、一言お待ちして  
おります。感情の書き方など指摘があればどんどんお願いします。  
次の投稿は明日から29日までを目指して頑張ろうと思います。  
内容はいよいよウル救出です。オルツス、ガンバ！  
では、ありがとうございました。次回もよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6499y/>

---

世界の調和者

2011年12月24日04時01分発行